



第2章 検出遺構

第2章 検出遺構

第1節 建物跡

第1項 竪穴建物跡

三内丸山遺跡では、これまで651棟の縄文時代の竪穴建物跡が確認、報告されている。

このうち、縄文時代前期に帰属するものは82棟、縄文時代中期が459棟、縄文時代後期が1棟で、時期の帰属が不明確なものは109棟である。時期別に最も多いのは縄文時代中期中葉（円筒上層d・e式期）の183棟で、中期後葉（榎林式期、最花形式期）が77棟で続く。このうち長軸長がおおよそ10mを超えるものは大型竪穴建物跡として次項で述べることとし、ここでは長軸長が10mに満たない竪穴建物跡について記載する。

以下に本遺跡において発掘調査がなされた竪穴建物跡の中で、構造を良好に示すものを図示し（図2-1-4）、各時期の竪穴建物跡について平面形・床面構造・支柱配置・炉・特殊施設といった特徴の変遷を辿る。

（1）円筒下層a・b式期（縄文時代前期中葉）（図2-1-1～4）

円筒下層a式期と円筒下層b式期のいずれかに帰属する建物跡4棟を含め22棟が報告されている。これまで明らかに円筒下層a式期のものとして報告された竪穴建物跡はないが、これはもともと円筒下層a式期の竪穴建物跡が少ないことや、未だ調査の及んでいない盛土の下に存在する可能性が高いことによる。

円筒下層b式期の竪穴建物跡は、北地区の北の谷西側や、南の谷北側で18棟検出されている。建物の平面形は隅丸長方形・楕円形を呈し、建物中央の地床炉を挟んで比較的近距离に支柱が2か所配置された構造のものが多い（図2-1-1～3）。また長軸長が6mを超えるものもみられる（図2-1-4）。壁柱穴は図2-1の2や3のようにまばらに巡るものや、図2-1の1や4のように確認されないものもある。3は地床炉から壁まで延びる溝を有するもの、4は平面形が隅丸長方形を呈し、支柱が4か所のもので、隅の張り出し部分は出入口と考えられている。

（2）円筒下層c・d₁・d₂式期（縄文時代前期後葉～末葉）（図2-1-5～11）

前段階と同様に北地区の北の谷西側や南の谷北側で検出されているが、北地区西側の西盛土周辺や北の谷東側にも検出域が広がる。報告されている竪穴建物跡は41棟あり、帰属時期が明確なものは縄文時代前期末葉の円筒下層d₁式期のものが17棟、円筒下層d₂式期5棟、円筒下層d₁～d₂式期6棟、円筒下層d₂式～円筒上層a式期が9棟である。円筒下層c式期は大型竪穴建物跡1棟の他は確認されていない。

円筒下層d₁式例では建物平面形は楕円形や隅丸長方形を主体とするが、僅かに不整形のものも見られる。長軸長は7mを超えない規模である。支柱穴は図2-1-6～8のように、建物中央の地床炉を挟んで2か所に配置された構造が多く、5のように支柱穴が未検出のものもある。壁柱穴は6では細い壁柱穴が密に、7は支柱と同規模の柱穴が粗に、5や8は細いものが粗に巡っている。このほか5

と6は壁際に円形及び半円形の「特殊施設」とされる張り出しを有し、7にも短軸側の壁際に所謂「特殊施設」状の掘り込みが見られる。中期中葉に盛行する施設であるが、既にこの段階で同様の施設が定着していた可能性が高い。

円筒下層 d_2 式から円筒上層 a 式にかけては、建物の平面形状は前段階と同様に楕円形や隅丸方形を呈し、規模も長軸長7mには満たない。床面はテラス状の段を有する竪穴建物跡が造られるようになる。図2-1-9、10はテラス状の面から一段下がった床面の平面形状が五角形を呈するもの、11は隅

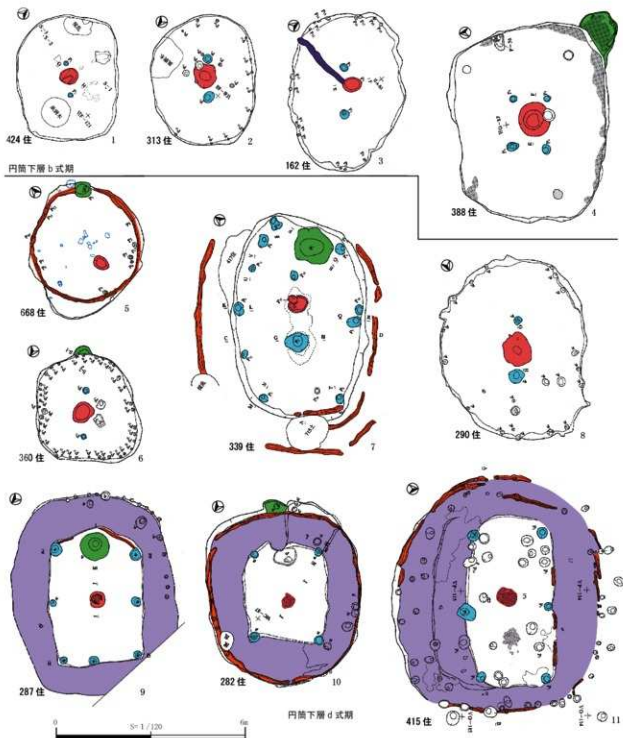


図2-1 円筒下層 $a\sim d_2$ 式期の竪穴建物跡

丸長方形を呈するものである。主柱穴は下段床面の四隅及び各壁の中間に配され、上段床面の壁際には細い壁柱穴や壁溝が巡っている。9は下段床面の五角形の一角に「特殊施設」が配置されている。11は「特殊施設」は見られず、上段床面に比較的太い壁柱穴と壁溝が見られるものである。

この時期の最大の特徴は前段階の平面形状が楕円形+主柱穴が2か所の構造のものに加え、新たにテラス状の段を有する床構造の堅穴建物跡が多く見られることがあげられる。さらに土器埋設炉の構築も、この時期の特徴である。

(3) 円筒上層 a・b・c 式期 (縄文時代中期前葉) (図2-2-12~19)

この段階のものとして44棟の堅穴建物跡が報告されているが、構造を良好に示すものは少ない。前段階と同様に北地区の北の谷西側や南の谷北側、北地区西側の西盛土周辺で検出されているが、円筒上層a式期では近野地区、円筒上層c式期では北地区北東側からも検出されている。

円筒上層a式として明確な例は14棟が報告されている。平面形状は楕円形や隅丸方形で、規模は大きなものでも長軸長は5.5mを超えない。前段階に見られたテラス状の段のある床面のもは、図2-2-13のように引き続き存在し、その影響と考えられる平面形状が隅丸五角形の14の例もある。主柱穴は13や14のような4本以上のものほか、床面の内側に2本(図2-2-14)もの検出されている。炉は土器埋設炉が主体となるが、地床炉もみられる。

円筒上層b式例は6棟報告されているが、良好な検出例は少なく3例を図示した(図2-2-15~17)。平面形状は楕円形や隅丸方形で、15は長軸長8mを越えるが、他は16や17のように長軸長3m前後である。主柱穴は15では床面の内側に6か所、16では3か所検出されている。炉は15と16の2棟は地床

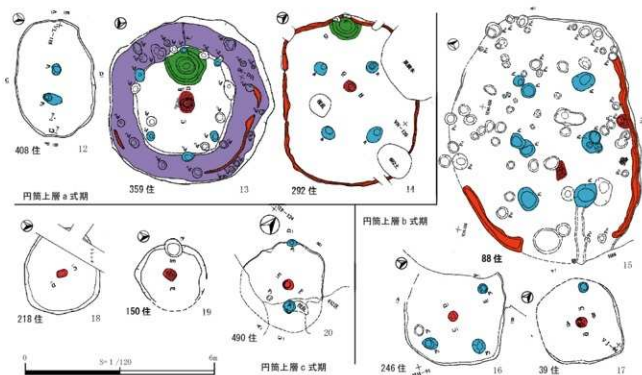


図2-2 円筒上層a~c式期の堅穴建物跡

炬だが、前後の段階を考慮すると土器埋設炬が主体とみられ、17は土器埋設炬の可能性がある。

円筒上層c式例も13棟報告されているが良好な検出例は少なく3例を図示した(図2-2-18~20)。共に長軸長2.5m以下の小型の円形を呈する。炬は建物中央に地床炬や土器埋設炬がみられるが、19は床面中央に浅鉢が置かれ、炬として使用されている。主柱穴は不明なものが多く、18は長軸線上の壁際に1か所、土器埋設炬を挟んだ床面に1か所検出されている。

(4) 円筒上層d・e式期(縄文時代中期中葉)(図2-3-21~48)

冒頭に記載のとおり183棟の堅穴建物跡が検出され、北地区では北の谷西側や南の谷北側といった旧野球場建設予定地や、西盛土周辺に加えて北の谷東側や北地区北東部でも多く検出されている。また南地区北側や近野地区の全域でも検出されている。堅穴建物跡の構造が明らかなものも非常に多い。

円筒上層d式期に明らかに帰属するものは72棟あり、円筒上層d式または円筒上層e式に明確に分離できないものが33棟ある。平面形は楕円形で、長軸長4m以下の小型の堅穴建物跡が主体であるが、覆林式や最花式期に多い建物平面形が卵形のものも既にもみられる(30)。炬は床面中央部に配されたものが多く、地床炬(23,24等)や土器埋設炬(22,26等)に加え、この時期に特有の周堤炬や(25,29,31)土器片敷炬(33,34)のような新しい要素を示すものもみられる。主柱穴は21,23等のように確認されないものも多いが、24のように縄文時代前期より見られる建物中央の炬を挟んだ2か所のもの、炬を中心に4か所のもの(25)のほか、軸線上の両壁際に2か所のもの(26等)があり、27や33は壁際の柱穴も含めた6か所のものとも考えられる。32は建物短軸側の両外側に、2対4か所の外柱穴が検出されている。床面には4~5か所の主柱穴が確認されており、その上位に渡したであろう梁材へと延びるように、外柱穴は建物中央側へと傾斜している。21は外柱穴に加え、周堤様の高まりが検出された例である。円形の床面上には主柱や炬は検出されないが、明瞭な張り出しを有する。周堤様の高まりがこの張り出しの反対側の壁面外側でも検出されていることから、この張り出しは出入口施設と理解されるであろう。その周堤様の高まりからやや距離を置いて外柱穴と見られるものが4か所検出されている。また円筒上層d式期には、「特殊施設」の構築が定着する。これらは建物最奥に構築された宗教施設や出入口という説もある。長軸側の壁面から張り出すもの(21,22,29,30等)、壁面に接するもの(23,24,26,31等)、壁に近い床面上に構築されるもの(25,32)が見られるが、多くの「特殊施設」は窪みの周囲に周堤状の高まりを形成するものである。

円筒上層e式期では78基の堅穴建物跡が検出されている。平面形と規模は前段階とほぼ変わらないが、卵形のものが増える(36~40等)。主柱穴についても前段階と同様で37や43は未検出のものであり、41,42,44は炬を挟んで2か所に主柱が配されるもの、39は4か所の主柱構造のもの、48は壁際に2か所ずつの主柱穴がみられるもので壁面が残存部だけでも1.36mと非常に深い。40は壁面の外側に柱穴が巡るものであり、47のような主軸に直交する方向に柱穴が2か所配されるものも前段階で既にもみられる(26)。炬は地床炬、土器埋設炬、周堤炬、土器片敷炬に加え、土器片囲炬や石囲炬がみられるようになる。また壁際に「特殊施設」を有するものが非常に多い(35~43,45,47)。36と45は壁際の「特殊施設」と炬のある床面との間に、段(36)や間仕切り状の溝(45)が構築されるものであり、「特殊施設」の機能を考える上で貴重な例であるかもしれない。

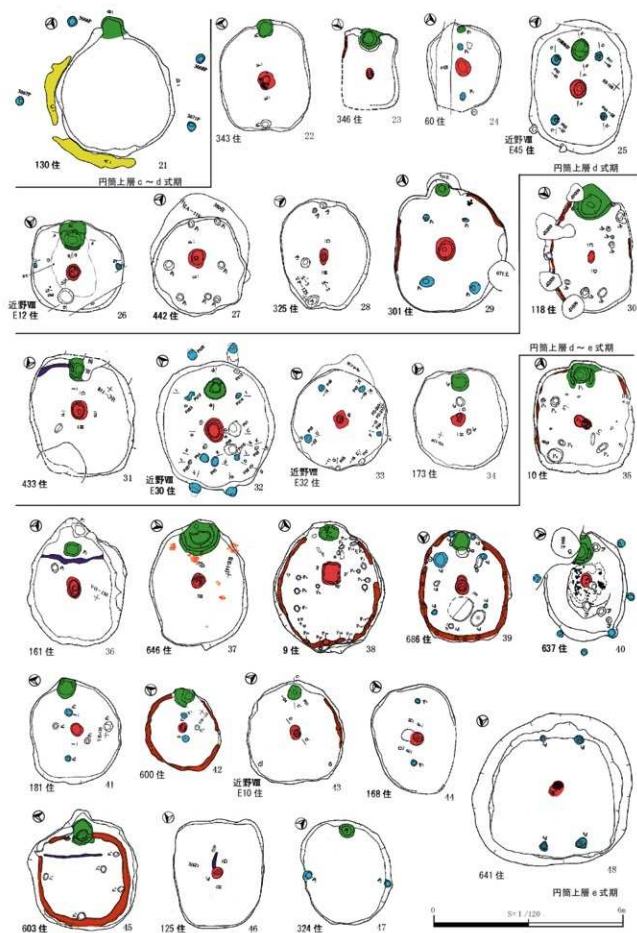


図2-3 円筒上層d・e期の竪穴建物跡

(5) 榎林式・最花式・大木10式併行期（縄文時代中期後葉～末葉）(図2-4-49～66)

この段階の堅穴建物跡は土器型式が不明確なものも含み125棟確認されており、特徴は、平面形が卵形の建物跡であり、明瞭な壁周溝が巡る(図2-4-50,51,57,58,63)。

榎林式期のものは20棟検出されており、北地区北盛土の西側から南西側にかけて多く検出され、ほぼ旧野球場建設予定地の範囲に収まるが、北地区北東側で1棟、近野地区からも2棟検出されている。長軸長は50や52のような3～4mのものほか、51のような5mを越える規模のものもみられる。また平面形は前述の卵形や楕円形であるが、前段階にも見られた明瞭な張り出しのあるもの(52)のほか、張り出し様の掘り込みが2基見られるものもある(49)。また53と54は堅穴の外側に周堤と考えられる高まりが確認された例である。53はほぼ全周に残存するが、54は前段階の同様の例(図2-3-21)のように、張り出し部には周堤様の高まりの残存は認められない。柱穴配置は4か所の構造と考えられるもの(51,52)、壁際に6～7か所程度配されるように見えるもの(49)、未検出のもの(50,53,54)がある。炉は地床炉、土器埋設炉、土器片敷炉、石囲炉が検出されており、建物の中心からややずれた位置に配されるものが多い。

最花式期は北地区の北盛土南西側を中心に旧野球場建設予定地で35棟検出されているが、北地区の第6鉄塔地区で1棟、北地区北東側で1棟のほか、南地区2棟、近野地区でも5棟検出されている。検出数は多いものの良好な状態を示す例は少ない。建物の平面形は卵形のもの(56,57等)のほか、隅丸方形のもの(55等)も見られ、規模は56,57のように長軸長6m前後のものもみられるが、55,60のように3～4mのものが多い。炉は最花式期にバリエーションが最も豊かになる。石囲土器片敷炉(55等)や石囲土器片囲炉、土器埋設土器片敷炉といった複数要素を組み合わせた炉の形態が特徴的であるが、これまでもみられた地床炉、土器埋設炉、土器片敷炉、土器片囲炉、石囲炉といった一要素のみの炉も検出されている。主柱穴は56では長軸上の壁際と中心付近に3か所あるほか、57,58は、2対3列の6本柱構造であろう。「特殊施設」はこの段階にもみられ、58は、円筒上層e式期の例(図2-3-36)と同様に、壁際の「特殊施設」と炉のある床面との間に段を有するものである。

大木10式併行期の堅穴建物跡は北地区の北盛土北西側や北盛土南西側、北地区の段丘北西側端部を中心に19棟、南地区で1棟、近野地区でも2棟検出されているが、炉のみ残存しているものも多い。建物跡の規模や平面形状は前段階と大きな差異はみられない。柱穴配置や炉の形態についても同様の傾向を示す。62は明瞭な張り出しを有するもので、石囲炉がその近くに構築されており、あたかも複式炉を有する大木系文化の堅穴建物に構造が類似しており、この張り出しは出入口と考えて良いのかもしれない。66は焼失住居であり、土屋根構造であったことを示唆する例である。さらにこの段階では、大木式土器文化圏に盛行した複式炉の影響を受けて、その要素が欠落したタイプが作られるようになり、三内丸山遺跡と沖館川を挟んで対峙する三内沢部遺跡例より、沢部型複式炉と呼ばれる。石囲炉に硬化面を有する掘り込みの前庭部が付属するもので、建物入り口側にピットが伴う例がある(64)。堅穴建物の形態だけでなく、炉の変化においても大木式土器文化圏との連動性を有することが指摘できるが、本遺跡では沢部型複式炉のほか、さらに要素が欠落した「掘り込み炉+掘り込み」構造のものが、極僅かに確認されるのみである。

(永嶋)

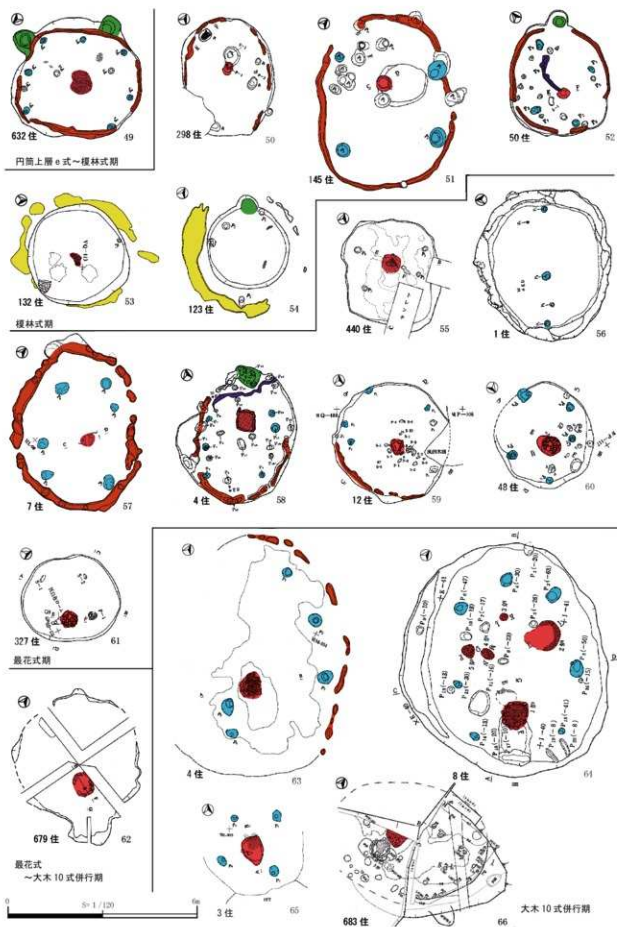


図2-4 栴林式、最花式、大木10式併行期の竪穴建物跡

第2項 大型堅穴建物跡

堅穴建物跡のうち、長軸10mを超えるものを大型堅穴建物跡として扱う。北地区の旧野球場建設予定地で縄文時代前期の7棟、縄文時代中期の5棟、近野地区で縄文時代中期の1棟を報告している。

1 縄文時代前期

北地区で円筒下層b式期（第120号堅穴建物跡）、円筒下層c式期（第163号堅穴建物跡）、円筒下層d₁式期（第8・422号堅穴建物跡）、円筒下層d₂式期（第164・496号堅穴建物跡）、前期中葉（第426号堅穴建物跡）のものを検出している。今までのところ、円筒下層a式期のものはない。

これらの大型堅穴建物跡は、中央部の掘立柱建物跡群の南側、東側の土坑墓列の近く、北盛土の南側、北盛土の西側に位置している。複数の土器型式にわたる多量の土器等が廃棄された状態で検出されることが多い。

長軸の方向は、南北に近いものと、東西に近いものの両方がある。平面形は隅丸長方形か楕円形で、長軸の長さは11.9mから15.1mの範囲である。主柱穴の配置がわかる4棟のうち、4対8本のものが3棟（第8・120・163号堅穴建物跡）、3対6本のものが1棟（第422号堅穴建物跡）である。炉は長軸上の中央部に地床炉が確認されているものが2棟（第120・422号堅穴建物跡）ある。

大型堅穴建物跡は改築が行われている例が多いが、第422号堅穴建物跡では2度の拡張が認められた。また、第8号堅穴建物跡では、長軸13.2m、短軸8.2mのものが、長軸11.5m、短軸6.6mに縮小されている。

その他の施設として、壁際が一段高くなるテラス状の施設（第164号堅穴建物跡）や断面が波状になるピットやU字状の溝（第422号堅穴建物跡）も検出されている。

2 縄文時代中期

北地区では、榎林式期（第91号堅穴建物跡）、大木10式併行期（第10・19号堅穴建物跡）、中期後葉（第89号堅穴建物跡）、細別時期が不明なもの（第156号堅穴建物跡）が検出されている。円筒上層a～c式期のものは検出されていない。

中期の大型堅穴建物跡は、中央部の掘立柱建物跡群の西側、北盛土の南側及び西側に位置している。この時期には、長軸が20mを超える長楕円形のもの（第19・91・156号堅穴建物跡）が登場する。最大のもは長軸32m、短軸9.8mの第91号堅穴建物跡である。長軸方向は長楕円形のもの北東-南西、その他は北西-南東となっている。主柱穴は4対8本（第89号堅穴建物跡）、長軸が長くなると6対12本（第156号堅穴建物跡）、7対14本（第19・91号堅穴建物跡）になる。炉は一般的な堅穴建物の変化と同様に、榎林式期の第91号堅穴建物跡は石囲炉（1.3m×0.8mの巨大なもの）、大木10式併行期のものは石囲土器片敷炉（第10・19号堅穴建物跡）である。北地区の大型堅穴建物跡では、明確に同時に存在したと考えられる複数の炉が確認されたものはない。

柱穴と壁溝の配置から、2回以上の拡張が認められるものがある。第91号堅穴建物跡では、残存状況がよい部分で高さ約80cmの壁と壁溝を確認した。壁溝の中に深さ約30cmの柱穴が連続して確認されたため、壁立式と考えられた。

近野地区では円筒上層d式期（第8号堅穴建物跡）のものが1棟検出されている。南北方向に長軸

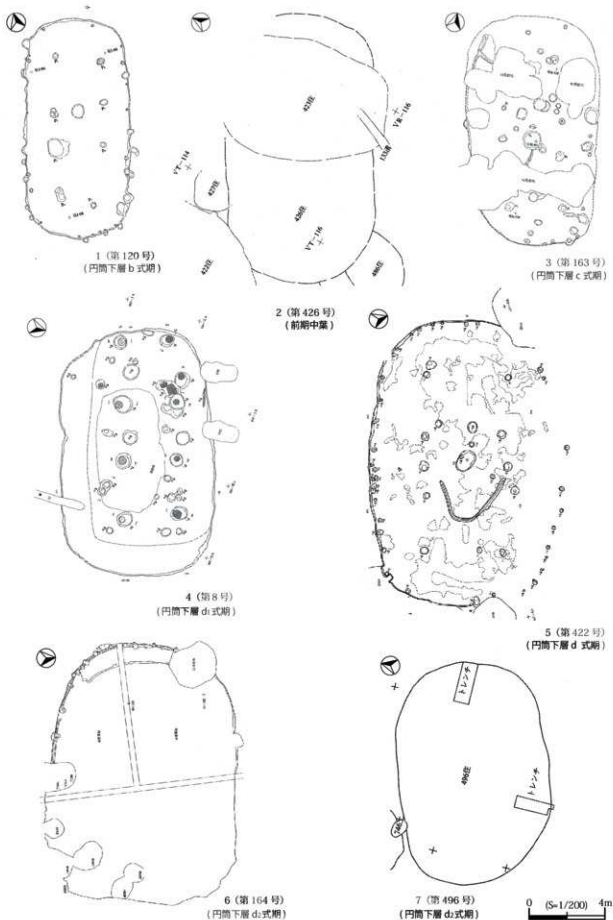


図2-5 大型竪穴建物跡(縄文時代前期)

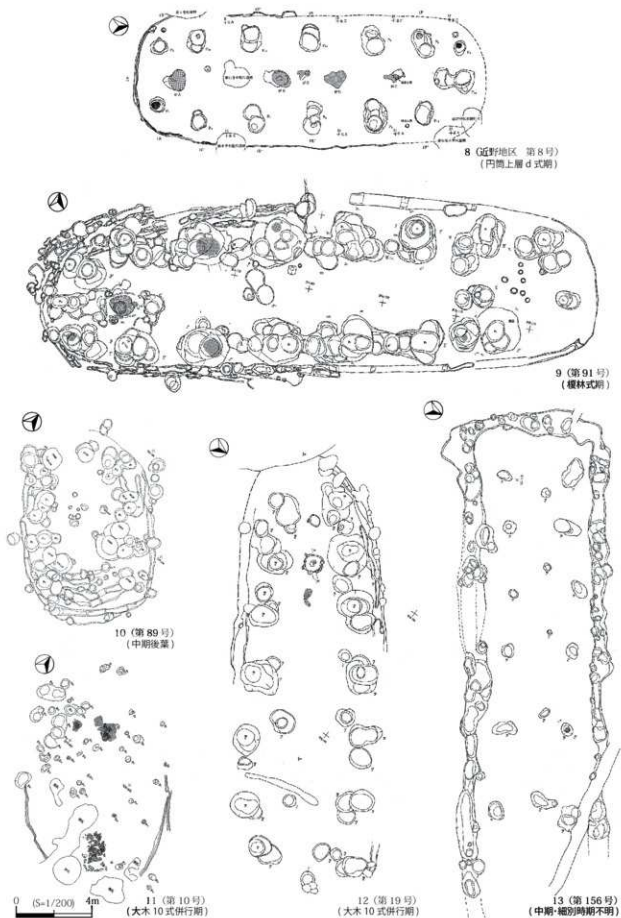


图2-6 大型竖穴建物跡 (中期)

を持ち、規模は長軸約19.5m、短軸約7mである。主柱穴は5対10本で、炉は長軸上に地床炉、小竪穴炉、土器埋設炉の3種類があわせて5個検出されている。

3 その他

大型竪穴建物跡は集落の中心に位置している。特に北盛土の南西側では、前期の大型竪穴建物跡2棟、通常の規模の竪穴建物跡と重複して第91号竪穴建物跡が作られており、重要な場所であったことを示唆しているように思われる。

竪穴建物跡が使用された期間を推定することは難しいが、通常の大サイズの竪穴建物跡にくらべ、改築されている割合が高いため、1棟の継続期間が長いものと考えられる。

中期後葉の急激な大型化は、当時の社会や環境の変化を反映したものと思われるが、現段階では説明することはできない。

(中村)

第3項 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、北地区の旧野球場建設予定地の中央部、中央部東側、南盛土西側、北地区の西盛土、北地区の北西部にまとまりがみられる。平面形式が長方形のものが大部分を占めるが、亀甲形のものも2棟検出されている。このうち、極めて大型の掘立柱建物跡（第11～15号及び第26号）については、第4項で述べる。

1 中央部東側

東側の土坑墓列の近くで、5棟検出した。規模がわかるものは、桁行2間×梁行1間が1棟、桁行1間×梁行1間が2棟である。平面形は長方形である。掘り方の規模は確認面で径0.7m～1.3m、深さは0.3m～1mである。他遺構との重複がない柱穴18基のうち、15基に柱痕跡が認められた。時期は円筒上層d式期～榎林式期である。

2 中央部

この地域は、掘立柱建物跡を構成すると考えられる柱穴が、東西約75m、南北18mの範囲に密集して広がっている部分である。柱穴の重複が激しく、また当初は調査期間が限られ、1棟の組み合わせを想定してから調査する時間的な余裕がなかったため、個々の柱穴にビットとして番号をつけ、記録する作業を優先させた。平面図上では、100棟ほどの組み合わせが可能であるが、保存のため、柱痕跡を確認した段階で調査を終了しているものも多く、報告書では19棟を記載した。桁行2間×梁行1間のものが多いが、桁行1間×梁行1間（約3.3m×2.3m）もある。いずれも平面形は長方形である。掘り方の規模は確認面で径1mを超えるものが多い。深さも1mを超えるものが多い。桁行方向、梁行方向の間隔がほぼ等しいものと、桁行方向の間隔が長いものの2種類がある。縄文時代中期に属するものと考えられる。主軸方向はほぼ東-西である。

3 南盛土西側

6棟確認している。主軸方向は東-西である。桁行2間×梁行1間と桁行1間×梁行1間のものがある。掘り方の径が0.6m程度の小さいもの、1.5～2m程度のものが混在している。

4 北盛土西側

他の掘立柱建物跡と異なり、前期や中期の住居が分布する範囲に位置する。主柱穴6基と桁行方向に張り出した支柱穴2基からなる8本柱の亀甲形を呈する。桁行方向の張り出し部の総長13.1m、桁行方向の総長5.4mである。主軸方位は北東-南西である。梁行より桁行の柱間寸法が長い長方形を呈する。柱穴の掘り方は約1.2m、深さは約1.4mである。全ての柱穴で柱痕が確認された。細別時期は不明だが、中期に属するものと考えられる。

5 西盛土

第21次調査で、1棟を調査した。梁行2間、桁行1間で、平面形は梁行と桁行の柱間がほぼ等しい長方形である。掘り方は径0.6m程度で、すべての柱穴で柱痕跡を確認している。

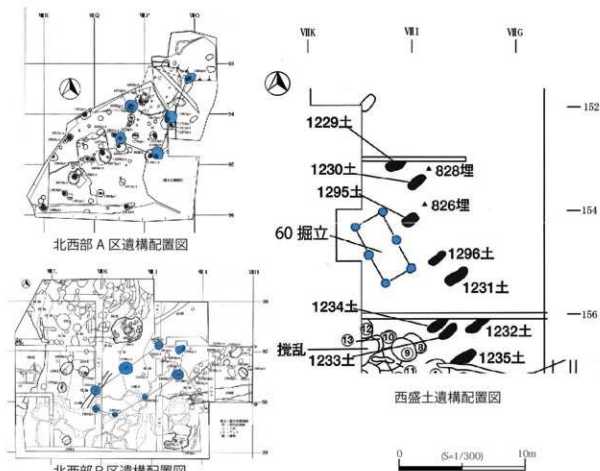


図2-7 掘立柱建物跡1

6 北西部

北西部では、平成7年以後、第1・6・9・19・25・27・29・30次調査で確認調査を実施し、A区とB区で1棟ずつ掘立柱建物跡を報告した。

A区では掘立柱建物跡を構成すると考えられる20基余りの柱穴を検出し、柱穴の配置等から1棟の掘立柱建物跡を確認した。柱穴の掘り方の径は0.9m、深さは1～2m程度である。時期は最花式期と考えられる。このうちの2基の柱穴では、木柱が残存していたため、木柱を取り上げ、恒久的な保存処理を行った。

B地区では、主柱穴6基と桁行方向に張り出した支柱穴2基からなる8本柱の亀甲形を呈する。桁行方向の張り出し部の総長8.9m、桁行方向の総長3.4mである。主軸方位は北東-南西である。全ての柱穴で径0.3m程度の柱痕跡を確認した。時期は、中期後葉から末葉と考えられる。

7 その他

掘立柱建物跡は地区によって主軸方向がほぼ揃っており、頻繁な立て替えが行われている。用途としては、食料の貯蔵、中央部については、集落の中心、道路と土坑墓列の端に位置するため、葬送儀礼との関係等が考えられる。

(中村)

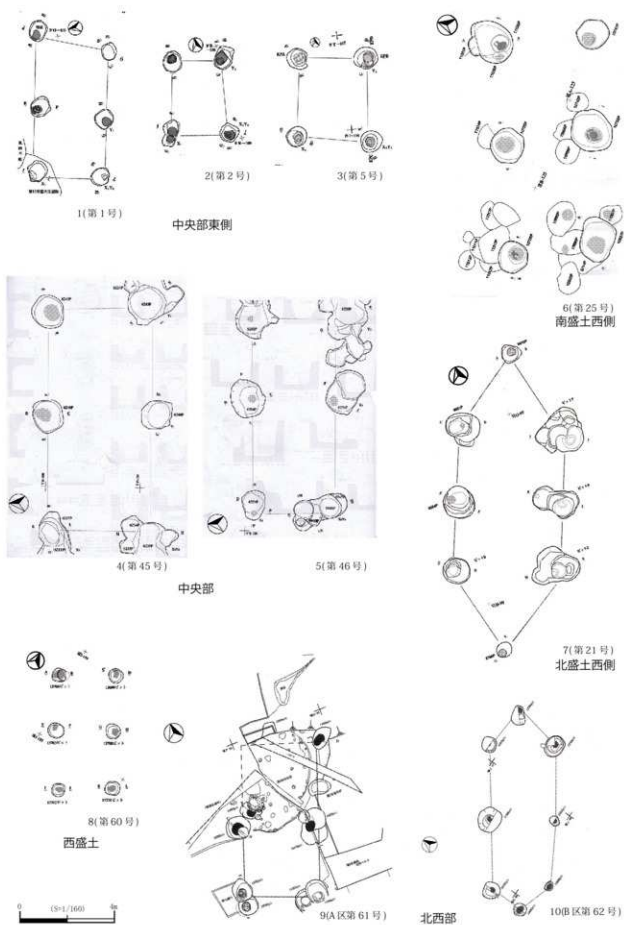


图 2-8 掘立柱建物跡 2

第4項 大型掘立柱建物跡

本遺跡が目目されるきっかけとなった第26号掘立柱建物跡に代表されるように、北地区を中心として多数の掘立柱建物跡が検出されている。中には直径が1mを越える木柱が出土したり、柱痕などが確認できるものもある。精査や完掘したものもあれば、柱穴の掘り方や柱痕の確認のみで止めたものも少なくないことから、その構築時期については大半は中期であることは明らかであるものの、詳細な時期が判断できないものが多数含まれている。

第30次調査（北地区）において、多数の大型掘立柱建物跡と見られる柱穴が検出されているが、柱穴の平面規模によって、大型（径80cm以上）、中型（40cm～80cm未満）、小型（40cm未満）に分類可能であることが指摘されており、それを踏まえ、ここで取り上げる大型掘立柱建物跡は大型の柱穴で構成されるものとした。本来は、柱穴と木柱は相関があり、太い柱には大型の掘り方を持つ柱穴が伴うと考えられるが、前述したように確認のみの柱穴が多数あることから、このような基準とした。

このような大型の柱穴による大型掘立柱建物跡は北地区を中心に、北地区北盛土北西側、北地区中央部、南盛土南西側、近野地区で確認されている。このうち、北地区北盛土北西側はほとんどが精査、完掘されているものの、北地区中央部と南盛土南西側では精査は一部で、掘り方と柱痕を確認し、記録するに止めたものが大半である。各地点での状況については別稿で記載するが、地点毎に規模や大きさに違いがあり、北地区北盛土北西側の大型掘立柱建物跡のみの状況や分析で全体を理解することは容易ではない。

したがって精査が終了している北地区北盛土北西側から検出した第11号、第12号、第13号、第14号、第15号、第26号掘立柱建物跡（以下、第〇号）について記載することとした。当初第26号以外については柱穴が大型であったため、土坑群と理解し、精査も二分法としたため、柱痕跡の確認をしていないものもある。その後柱穴より木柱が出土したため、掘立柱建物跡を構成する柱穴であることを認識し、掘り方及び柱痕跡の確認を主にした精査の方法に変更したため、同じ掘立柱建物跡としている柱穴についても情報量の違いがある。

なお、掘立柱建物跡の確認については建築史の専門家であり発掘調査員であった高島成侑氏（当時八戸工業大学教授）と調査担当者が現地において、図化した配置図をもとに、その構成を確認したものである。

1 規模と形態、柱穴配置、主軸方位

柱穴配置から見た平面形は基本的に長方形である。第11号と第26号は梁行：桁行＝1：2の正方形が連続する形態となっているが、他は桁行総長が1：2未満となっている。第11号のみ8本柱で、他は6本柱であることから基本的には6本柱と考えられる。

規模は梁行総長4.2～6.7m、桁行8.3～9.8mとなっており、10mは超えないものの十分に大型の構築物と言え、本遺跡における一般的な堅穴建物の平均床面積4～6倍となっている。本遺跡では第26号のようにいわゆる縄文尺（35cm）の適用がこれまで指摘されているが、第11号～第15号においても縄文尺の適用と考えられる柱間寸法のものが多いが、中には適用に疑問が残るものもある。柱の芯で本来は計測すべきものであるが、柱そのものが残存しないことから断定はできないが、各柱穴の掘り

方の中で縄文尺の適用を考えることは可能である。

柱穴は大型で全て1mを超え、最大では2mを超えるものがある。深さは浅いもので55cm、深いもので161cmであり、浅いものについては構築場所が斜面地であることを考慮する必要がある。形状は基本的には平面は円形ないしは楕円形、断面もほぼ円筒形であり、特殊な形状ではない。第26号のビット4とビット6の底面壁際からは小ビットが検出されており、構築時の作業に伴うものである可能性は高い。

第26号では柱の据え方（固定方法）がわかるものがある。先行して精査した北地区中央部の所見から柱の傾きを慎重に確認することとし、その結果、ビット2・3・4については柱が内側に明らかに傾き、他のビットについてもその可能性が高いことを確認した。この点については第11号～第15号では確認していない。関連して、第11号～第15号・第26号の柱穴内の埋土は共通して地山に黄褐色を基調とし、非常に堅緻で時には精査の掘削が困難となるような状況であり、柱の固定を意識したものと考えられた。

主軸方位については重複関係にある第11号から第14号まではほぼ同じであり、ともに単独で確認された第15号と第26号についてもほぼ同じ方向と言える。第11号～第14号と第15号・第26号では主軸方位は同一ではないものの、近似しているとも言えなくはない。

2 出土遺物と年代及び新旧関係

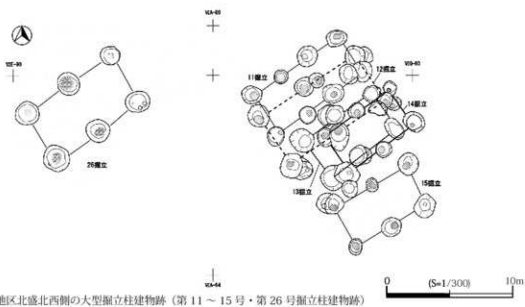
第11号～第15号については大木10式併行期以降の形成である第Ⅱ層に覆われていたことから、それ以前の所産であることは間違いない。第Ⅱ層では、一部第Ⅲ群10類土器が柱穴堆積土内から散発的に出土しているものもあるが、これは柱の腐食に伴い、柱痕跡部分に第Ⅱ層が落ち込み、その中に含まれていたものと理解すべきである。それらを除けば最も古いもので円筒下層d₂式、新しいものでは最花式となるが、圧倒的に多いのは円筒上層d・e式、これらを含む中期中葉までの土器）であり、構築時期もこの中に取まるものと考えられる。一方、覆林式が出土していないことも興味深い。

第26号ではビット6の底面から最花式土器が出土しており、柱の高精度年代測定結果もほぼ同時期と考えられることから、概ね最花式期の所産と理解できよう。

出土遺物及び重複関係から、本地点における掘立柱建物跡の大まかな変遷は第11号～第14号→第15号・第26号となる。第11号～第14号においては第11号→第12号→第13号→第14号との理解ができるが、各柱穴の重複関係を再度見直す必要があり、これらの新旧関係については現段階では留保することとした。

大型掘立柱建物跡の用途・目的等については諸説あり、現段階で確定できるものではなく、特に第26号のみの所見で検討することは適当ではない。二至二分との関係性も指摘されるところだが、主軸方位の異なる大型掘立柱建物跡の存在や、縄文時代と現代とは地軸の傾きが違い、当然ながら現代の景観との適合性を主張したとしても説得力に欠け、ひとつの仮説の域を出るものではない。本遺跡における大型掘立柱建物の出現の経緯や背景、周辺以降との関連をさらに整理、検討することが肝要である。また、他遺跡でも検出例があることから、それらとの比較検討も必要である。縄文人の世界観と密接な関連があるとすればなおさらのことである。

(岡田)



北地区北盛北西側の大型掘立柱建物跡（第11～15号・第26号掘立柱建物跡）

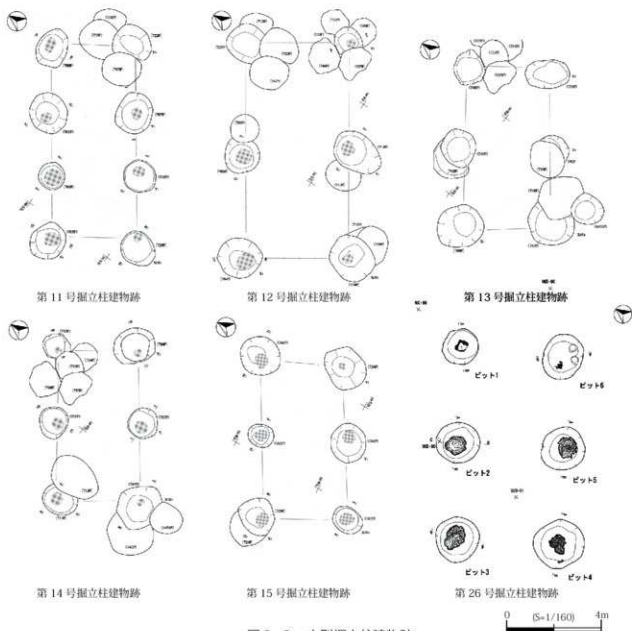


図2-9 大型掘立柱建物跡

第2節 道路跡

道路跡は北地区で2条、南地区で1条の計3条が確認されている。道路跡の範囲が掘削され、底面にはロームブロックの貼り付けるなどの共通した特徴があり、土坑墓を伴っている。筋状に長く連続し、ローム質土を露出させ、底面は堅く締まっていることなどから、道路跡と判断したものである。

第1号道路跡は北地区東側に位置し、2列の土坑墓の間に掘り込みや、くすんだローム土の広がりとして確認される。ⅡP付近以東では30~40cmほど掘り込んでつくる。尾根筋に沿って延びるが、ⅠK付近以東は尾根筋を外れ、浅く落ち込む沢に沿って分布する。全体としては緩くS字状に屈曲して延びる。台地平坦面では幅が広く、道路跡の上幅はⅡP付近で8~10mであるが、ⅠP周辺以東では沢状の地形に合わせて7~8m以下と狭くなる。

明確な掘り込みは確認されなかったが、ⅡP以西でも土坑墓列（土坑墓①、次節参照）が確認され、ⅣP以西の旧球場建設予定地では土坑墓列の間がやや濁った土色となっている。土坑墓列の間を道路跡と考えれば、最大幅は約15mにもなる。土坑墓西端から東端までの土坑墓列の総延長は約420mにもなり、道路跡も同様の規模となる。なお、土坑墓列の西端からは掘立柱建物跡の柱穴群が連続して広がる。

第Ⅵ層（千曳浮石相当層）まで掘り込み底面とし、部分的には第Ⅶ層が露出しているところもある。底面にはクラックがみられ、露出による乾燥、ひび割れによるものと推測される。また、ロームを貼り付けたような痕跡があり、修繕などの行為が行われた可能性が高い。

道路跡に明確に伴う遺物はない。内部には第Ⅱ層が堆積し、それ以前の構築と判断される。遺構の重複関係では、土坑墓はいずれも道路跡の上場付近を掘り込んでつくり、土坑墓に付随する第7号配石遺構では、路面に貼られたロームの上面に礫が配置されており、重複関係ではいずれも道路跡が古い。土坑墓は出土遺物から、列の西側（旧球場建設予定地、第4次調査区）では縄文時代前期末から中期前葉、中央から東側（第7次・第8次調査区）では中期中葉の時期と大まかに推定され、道路は土坑墓に先行してつくられたと考えられるため、前期末には道路として整備されていたものと考えられる。

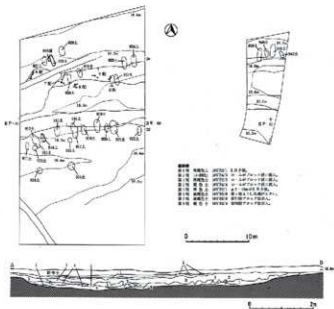


図2-10 第1号道路跡の拡大図

第2号道路跡は南地区のⅥJ-205から北地区のⅦE-135に位置し、遺跡西側にある中位段丘への上がり際に沿って北西から南東にかけて直線的に確認された。ⅦG-136からⅣJ-204まで、斜面南



图 2-11 道路跡・土坑墓・环状配石墓

東に土坑墓群や環状配石墓が確認され、土坑墓列は約370mにわたり広がる（土坑墓②、次節参照）。その土坑墓列に平行して道路跡が延びる。道路跡の両端は明確ではないが、北西側の南盛土西側では掘立柱建物跡が幅約5mの間隙を挟んで並列する。道路跡は、この間隙に連なる可能性がある。南東側の近野遺跡の調査では、道路や土坑墓は確認されておらず、確認された範囲で収まるものと考えられる。

道路跡を挟んで確認された第25号と第26号配石遺構間の距離は16.8m、第23次調査で確認された掘削幅では13.4～21mであることから、道路跡の幅は13～21mほどである。底面は第Ⅵ層まで掘削し、ローム質土を露出させている。路幅が広いところでは掘削深度が浅く、路幅は狭いところでは掘削深度が深くなり、南東側にいくにしたがって狭くなる傾向にあり、第26次調査区では掘削の痕跡は明確ではない。

底面には、第Ⅶ層を起原とするロームブロックが貼り床状に広がるところもある。ロームブロックは広範に確認されており、修繕などの管理が度々行われたものと想定される。また、貼られている土は、場所によっては炭化物を多く含むなど一様ではないが、底面は全面が硬化している。

底面からは縄文時代中期後葉期（最花式期）以降を主体とした土器が出土した。堆積土には中期後葉以降に形成された第Ⅱc層が堆積する。遺構の重複関係では、円筒上層c式期の第839号埋設土器がロームブロックを掘り込んでつくられ、中期中～後葉期と考えられる第30～32号配石遺構はロームブロックの上につくられている。これらから、道路跡の構築時期は円筒上層c式期よりは古いものと判断される。

第3号道路跡（遺構番号は付されていないが、遺跡西側の中位段丘上の道路跡を第3号とする）は、北地区西端の中位段丘上に位置し、平坦面の落ち際のⅦO～ⅦE-146～162で、主にロームブロックの広がりとして確認された。北西から南東方向に延び、確認された長さは約75m、幅はロームブロックの範囲から最大約12mで、北西側で幅が狭くなる。最も深い部分は深さ20cmで第Ⅵ層まで掘りこまれているが、第1・2号道路跡と比べ、掘り方は判然としない。ロームブロックの広がりの南西約17mで道路跡に直交して土坑墓列が並ぶ（土坑墓③、次節参照）。北西側には土坑墓は非常に少ないが、その可能性がある第1357号土坑はロームブロックを切ってつくられている。本遺構の底面からは中期中葉から末葉の土器が出土しており、それに近い時期のものと考えられる。

なお、道路跡とは報告されていないが、南地区の東側へ延びる低位段丘の稜線部から2列の土坑墓列が検出されている（旧西駐車場、土坑墓④、次節参照）。列の間は4～5m離れており、写真で見ると限りでは周辺の地山の土色より濁って見える。第1号道路跡に見られた状況と同様の可能性が高い。

第2号道路跡との関係を確認するため、延長上の調査を行ったが、運動公園建設時の造成により、明確にできなかった。

（小笠原）

第3節 墓

第1項 土坑墓

1 土坑墓列の分布

土坑墓は楕円形を基本形とする形状や出土遺物、分布などから判断し、これまでの調査で約470基が確認されている。垂飾品が出土した円形の土坑もあることから、楕円形の形状以外にも土坑墓の可能性のある遺構があるが、本項では検出数が多い楕円形の土坑墓を扱うこととする。土坑墓は多くは掘り込みのみであるが、礫が土坑墓周囲に配置されるものや、土坑墓上部に大きめの礫が確認された配石墓もある。なお、本遺跡に特徴的に見られる環状配石墓は、次項で扱うこととする。

土坑墓は①北地区東半（ⅠA～ⅠO-63～112）、②北地区と南地区の境界（南地区の中段段丘へ上がる変換部：VF～ⅧH-130～186）、③南地区の東側へ延びる台地上（ⅣH～ⅣS-173～179）、④南地区の中段段丘の上部（ⅧD～ⅧJ-150～159）からまとめて検出されている（図2-11）。道路跡に付随し、道路跡に直交し列状に配置されるのが大きな特徴である。

①では、2列に並列した土坑墓列が2箇所検出されている（図2-12 ①-1・2）。そのうちの1列（①-1）は長大で、「北の谷」の東側の台地中央部から東端までの約420mにわたって広がる。台地中央部では標高約18mの平坦面につくられ、東に向かうにつれて南北に向かって低くなる台地の稜線部につくられ、東端付近では標高約7mの緩く落ち込む沢状の地形に沿って道路跡と土坑墓列がのびる。

本調査を実施した旧野球場予定地では、56基の土坑墓が確認されている。土坑墓列の西端では、北側の列が弧状にラッパ状に広がる。旧野球場の東側は部分的に試掘調査を行っており、本調査した範囲は土坑墓列が広がると想定される範囲の1/6ほどである。土坑墓が同じ密度で分布すると仮定すれば、300基強がつくられていることが想定できる。南北の土坑墓列の間隔は最大15mで、東側では6～7mと狭くなる部分もある。

もう1列（①-2）は、1-①の北側に位置し、東西約45mにわたって広がる。土坑墓は25基が確認されている。南側の列周辺は堅穴遺構と重複し、不明確である。①-1とは土坑墓列の長さや、列間が3m前後と狭いこと、列の構成要素に埋設土器が多数含まれる点で異なる。

①-1・2とは軸が異なる土坑墓もある。①-3は列②の東側に位置し、主軸方向がおおむね北東-南西である。主軸をほぼ同じくし、12基が密集する。①-4は列①-2の南西側に位置し、主軸方向は（北）東-（南）西で6基確認されている。

②の道路跡は中段段丘への上がり際の標高20～21mの等高線に沿うようにつくられ、土坑墓は道路跡の西側に主に分布する。南盛土南西から南の近野地区付近まで約280mにわたる。道路跡に沿って

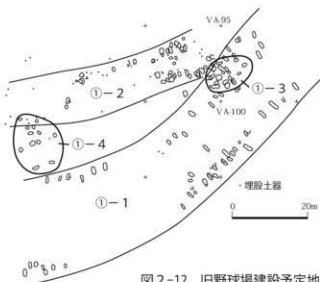


図2-12 旧野球場建設予定地で検出された土坑墓

約190基が確認されており、北地区の集落に近い北西側では特に密集する。しかし、遺跡南東端周辺ではまばらとなり、環状配石墓列よりも若干北西側で途切れる。また、青森市教育委員会の調査では標高24m付近とより高いところから土坑墓列の一部が確認され、県の周辺の調査でも環状配石墓に重複しながら確認されており、実数はさらに増える。

③は第18・21・24次調査で確認されたもので、中位段丘上の平坦面の落ち際に平行する。確認されたのは17基で、約40mにわたり分布する。その後の周辺の調査でも検出されており、その範囲はさらに広がる。

④は昭和52年度の調査で検出され、特徴的な配列として注目されたもので、56基の土坑墓が東西方向に約50mにわたって延びる。平成15年度に西側の延長部分と②との関係を把握するため、調査（第26次調査）したが確認できなかった。また、台地先端の列の延長にあたる東側は公園施設の一部で盛り土されており、土坑墓列の把握には至っていない。なお、平成6年度のサッカー場建設予定地の試掘調査で、さらに東側にトレンチを設定しているが、土坑墓は確認されていない。

2 土坑墓の諸属性

土坑墓の規模等の諸属性について、本調査が進められた北地区の①のうちの旧野球場建設予定地、南地区の④の旧西駐車場の調査成果を中心に整理する。

平面形は①では楕円形を基本とし、隅丸長方形、小判形などがある。④でも楕円形を基調とし、隅丸長方形・台形などがある。規模は長軸250cmを超えるものから80cmのものまであり、平均は157cmである。短軸は40～120cmで、平均は68cmである。②・③では確認のみのものが大半だが、規模は①・④と同様である。

図2-13は、①・④で検出した土坑墓のうち規模が判明したものをグラフ化したものである。①の各列には円筒下層式土器片が出土し、前期と判断される土坑墓がある。それらは短軸幅が広い傾向にある。深さは旧野球場では20cm以下のものが最も多く、大半は40cm以下である。旧西駐車場では50cmを超えるものが多い。縄文時代中期と考えられる土坑墓のうち、①-2～4では長軸が170cm以下のものが大半だが、①-1では200cmを超えるものも含まれる。また、旧西駐車場（土坑墓④）では、旧野球場（土坑墓①）に比べ短軸幅が狭い傾向にある。

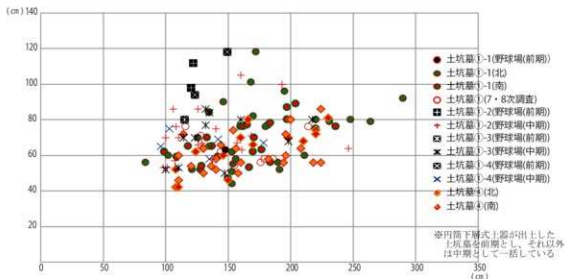


図2-13 土坑墓の規模

壁は直線的に立ち上がるものがほとんどであるが、長軸の一方が外傾して立ち上がるものもある。底面は平坦なものがほとんどである。土坑墓④（旧西駐車場）の調査で、土坑墓列の間に向かい底面が最大で22°、平均で約10°で傾斜することが報告された。底面の傾斜は土坑墓①の北地区東半（旧野球場）でも確認されており（図2-14）、その後の第4・7・8次調査でも確認されている。第8次調査では15°傾斜するものもある。また、土坑墓の中には、壁が傾斜の高い側（道路跡と反対側）が外傾し、道路側が直立するものもある。



図2-14 土坑墓①-1の底面傾斜

また、土坑墓①には底面の壁際に溝が巡るものが5基ある。土坑墓②の土坑墓では、4割弱から壁溝が確認され、土坑墓①に比べ割合が高い。環状配石墓では一部で板状の炭化材が壁溝にはめ込まれたように直立の状態出土したことから、土坑墓壁面に板材が巡る構造と考えられる。

堆積土は人為堆積土で、ローム質土を多量に含むものが多い。第8次調査区（北地区）では上部にマウンドが確認されたものがある。環状配石墓でもマウンドが確認されたものがあり、本来的にはさらに多かった可能性がある。

礫が土坑墓の周囲の一部に配置される配石墓は、土坑墓①や④で確認された。土坑墓①-1では土坑墓列の中央付近（第7次調査）で2基検出され、いずれも西側の長軸側に半周する。また、土坑墓①-3でも1基検出された。土坑墓④では2列に分かれた土坑墓列の間（道路跡）に面する側で、短軸を囲むように配置されている。上面に礫が配置された配石墓は土坑墓①・②で確認された。土坑墓①では土坑墓列の東端から検出され、土坑墓②では列の北西側にまとまる。大きな礫が単独で確認されたもの、小型の礫が複数個まとまったもの、組み合わせられたものがある。

なお、土坑墓①や④では畑の耕作など後世の攪乱があったものと推測され、礫の抜き取りや移動があった可能性があり、配石墓が本来の形状を示しているか判断ができないものも含まれる。

3 出土遺物

遺物は、土坑墓①のうち旧野球場予定地の調査では88基中28基から出土（約31%）した。土器が1個体横転した状態で出土したもの（第166号）やヒスイ製の玉が出土したもの（第66号）もあるが、石器の出土例が目立つ。石鏃、異形石器、石皿片、石冠などが1点出土した土坑墓が16基、敲磨器類や石皿、半月状扁平打製石器などが2点出土した土坑墓が6基ある。それ以上の点数の出土例としては、第139号土坑からは異形石器が4点出土し、第4次調査では、石鏃が10点出土した。

土坑墓④では、北地区に比べ遺物の出土は少なく、56基中、円筒上層e式や椀形式土器が出土したものが各1基、石鏃が出土したものが1基ある。土坑墓②は確認のみのものが大半であるが、精査したうち1基では円筒上層b式土器が横転した状態で出土したことがある。

4 土坑墓の時期

土坑墓の時期については、土器等が少なく、明確な時期認定が難しいものが多い。

旧野球場建設予定地の土坑墓①-1では第124・177号土坑などで円筒下層d式土器片など下層式土

器片が出土し、前期末の土坑墓である可能性が高い。また、第135号土坑では円筒下層d₁式土器片と上層a式土器片が出土し、前期末～中期初頭のものと考えられる。また、第62号土坑からは円筒上層d式土器片が、列の西端に位置する第433・435号土坑からは中期後～末葉の土器片が出土している。また、第4次調査区からは円筒下層式や円筒上層b式土器片が出土した土坑墓があり、土坑墓列のほぼ中央に位置する第7次調査で検出した土坑墓には、円筒上層d式期の埋設土器より新しいものがある。さらに、土坑墓列の東端付近（青森市教委調査）の土坑墓からは円筒上層e式土器が1個体出土した。以上から、土坑墓①-1では西側により古い前期末や中期初頭のもので、中央から東端では中期中葉と考えられるものがあり、土坑墓はおおむねこの時期幅に収まるものと考えられる。旧野球場建設予定地では円筒上層d式土器片が出土したのものもあるものの、大まかにみれば土坑墓列は西側から東側へ広がっていったものと考えられる。

土坑墓①-2では、第166号土坑で横転した円筒上層d式土器、第60号土坑で円筒上層d式土器片が出土するなど、中期中葉のものと考えられるものもある。この列に含まれる埋設土器は、円筒上層a～d式期のもので、中でも円筒上層c・d式期のものが多い。以上から、土坑墓①-2は中期初頭～中葉、中でも中葉に主体をおいた時期と想定される。

土坑墓①-3では第161号土坑から円筒下層d₁式土器片、第108号土坑で円筒下層d₁式・上層a式土器片、第47号土坑で円筒上層c・d式土器片が出土したことから、前期末～中葉、中でも中期前葉前後に主体をおいた時期と想定される。土坑墓①-4では、中期初頭～中葉の土器片が出土し、同時期が想定される。

②での土坑墓はVI T～VIII E-130～141で特に密集する。上述のとおり、中には円筒上層b式土器が横転した状態で出土した土坑墓もある。遺構の重複関係では、土坑墓を切って環状配石墓が構築されている。年代測定の結果、環状配石墓は中期後葉を中心とした時期と考えられ（詳細は第2項参照）、土坑墓はそれよりも古いと判断される。遺跡の保存のため精査した遺構が限定され、時期の詳細が不明確なものがほとんどであるものが、②の土坑墓列は中期前葉から中葉にかけてのものとして想定される。

③の土坑墓列は、中期前半の土器が出土したのものもあり、中期前半の円筒上層式期を想定しておきたい。

④の土坑墓の一部からは榎林式土器が出土しており、中期後葉を中心とした時期と考えられる。

それぞれの土坑墓列は時期的には重複しながらも徐々に変遷したと考えられる。それをまとめると以下になるだろう。土坑墓列の中でも①と②は規模、検出数などが際立ち、本遺跡において主体的な位置を占めた土坑墓列といえる。なお、集落の開始期である前期中葉期では南盛土の堆積層の下から楕円形の土坑が検出されており、集落開始期にはそこに墓塚があった可能性がある。

(小笠原)

	前期中葉	中期後～末葉	中期初頭～前葉	中期中葉	中期後葉	中期末葉
①-1						
①-2						
①-3						
①-4						
②						
③						
④						

点線は時期を特定しにくいもの

表2-15 土坑墓の時期

第2項 環状配石墓

環状配石墓は、環状の配石をともなう土坑墓であり、現在34基が確認されている。以前の調査において、内部の土坑墓が未精査のものも、配石の平面形や規模などから、配石内部に土坑がともなう可能性が高いと考え、ここでは環状配石墓に含めている。また、内部に土坑が確認されていないものについては次節の配石遺構を、配石をともなわない土坑墓については前項を参照されたい。

1 環状配石墓の分布と形態

(1) 北地区

北地区では、5基の環状配石墓が確認されており(A-1～5)、いずれも、第1号道路跡にともなう土坑墓列中に構築されている。A-3,4はいずれも配石部が一部しか残存していないが、環状を呈するものと考えられるため、本項に含めた。A-5は、南側が若干開く不整形円形を呈し、配石の一部が埋葬部である土坑と一部重複しており、土坑墓と配石の構築に時間差があった可能性がうかがえる。また、A-1,2は配石の平面形が、長軸がやや長い楕円形を呈する。

(2) 南地区

南地区では、第2号道路跡周辺で24基(A-6～C-25,27,28)、第3号道路跡周辺で1基(C-26)、旧西駐車場地区で4基(C-29～32)の環状配石墓が確認されている。

① 第2号道路跡周辺

24基の環状配石墓が確認されており、他地点と比較すると圧倒的に多い。これらは第2号道路跡の両側に配置されているが、特に西側に集中する。

配石の平面形は、環状配石墓を構成する円弧に対して礫の長軸が平行・直交となる組み合わせが見られる例(A-6,8,B-12,13,14,15,16,C-24)や、環状配石墓を構成する円弧が(一部)2重になる例(A-9,10,B-17,C-23)、配石に大型の礫を使用する例(A-6,8,9,B-12,14,17,18,C-20,21,24)などが確認されている。

また、配石に使用された石材の石材鑑定が実施されており、安山岩を主として、石英安山岩、凝灰岩、砂岩、泥岩、流紋岩などが確認されている。A-6では、安山岩を主体として、石英安山岩が西側(特に南西側)、凝灰岩が東側に多く分布することやA-8では安山岩を主体とし、石英安山岩が東側に、泥岩が西側にわずかに分布すること、B-12では凝灰岩が集中して分布する箇所が見られるなど、石材によりその分布に粗密がある。安山岩の一部について珩晶および石基の鉱物組成の分析を行ったところ、青森市内の西部から中央部を流れる荒川の上流域から入手したことが指摘されている(青森県教育委員会2010)。

② 第3号道路跡周辺

1基の環状配石墓が確認されている。配石は一部が風倒木などによって欠落するが、環状を呈している。また、環状配石墓にともなうと考えられるマウンドも確認されている。

③ 旧西駐車場地区

4基の環状配石墓が確認されている。いずれも配石部が一部しか残存していないが、環状を呈すると考えられる。また、配石の方法には規則性（2個平行—1個直交など）がある例も見られる（C-29—31）。

2 環状配石墓の帰属時期について

環状配石墓はこれまでの調査で縄文時代中期中葉～末葉の年代観が考えられている。遺物が出土することは非常に稀であり、時期決定は困難なものが多い。ただし、環状配石墓が確認された地点は、すべて本遺跡で確認されている墓域内である。その墓域内において、配石を伴わない同時期の土坑墓に作用する配置上の規則性は、環状配石墓にも作用することから、墓域の形成時期と環状配石墓の構築時期に大きな差はないものと考えられる。

北地区で確認されているA-4付近では、近接する第928号土坑が円筒上層d式期の埋設土器より新しいことや、A-5が検出された付近の第241号土坑（青森市教委1994）から円筒上層e式の完形土器が出土していることから、縄文時代中期中葉以降に構築されたと考えられる。また、A-1,2は、土坑墓の掘り方に沿うように礫を配している。青森県五戸町の西張平遺跡においては、類似した配石遺構およびそれとともなう土坑墓（第55号土坑）の底面から円筒上層d式の埋設土器が確認されており（青森県教育委員会2006・2007）、本遺跡例もそれに近い時期が考えられる。

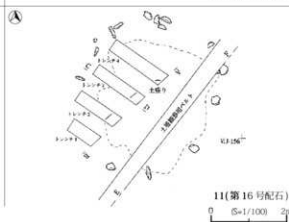
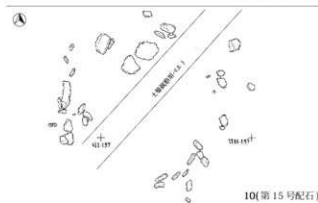
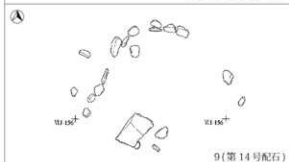
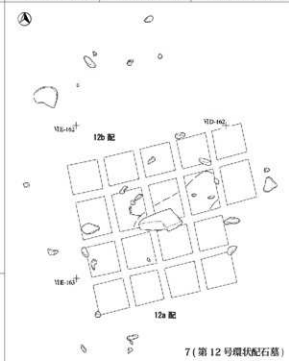
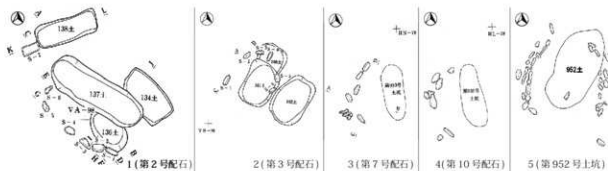
南地区の第2号道路跡周辺で確認された環状配石墓は、そのほとんどの配石上位に縄文時代中期末葉以降に堆積した第Ⅱ層が確認されていることから、中期後葉以前に構築されたと考えられる。また、B-17, C-24などで確認された炭化材で放射性炭素年代測定を実施した結果、榎林式期の可能性が高いと指摘されている（國木田2011）ことも層位関係から見た年代観と調和的である。

第3号道路跡周辺で確認された環状配石墓は、配石が縄文時代中期中葉を下限とする盛土の上に配され、一部ではマウンドと考えられる堆積土の上位に第Ⅱ層が確認されたことから、中期中葉～末葉頃に構築されたと考えられる。また、堆積土からは中期後葉～末葉の土器片が出土していることも層位関係から見た年代観と一致する。

旧西駐車場地区で確認された環状配石墓は、中期中葉～後葉に構築された土坑墓列中に構築される。配石とそれとともなう土坑墓から、遺物の出土は確認されていないが、隣接する第2号土坑の底面から、円筒上層e式から榎林式にかけての完形土器が出土している。

以上のことから、環状配石墓は従前から指摘されてきた縄文時代中期中葉～末葉の段階に構築された可能性が高いが、配石の規模や形態が異なることが構築時期の差異を現している可能性も考えられる。

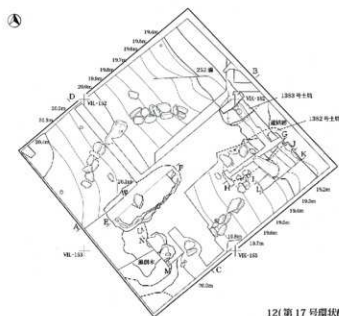
（濱松）



※括弧内名称は既刊報告書の遺構番号

0 5=1/1000 2m

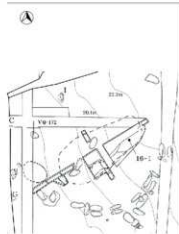
図2-16 環状配石墓 1



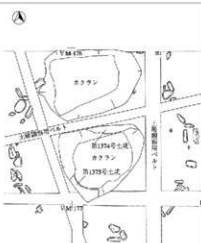
12(第17号環状配石墓)



13(第24号配石)



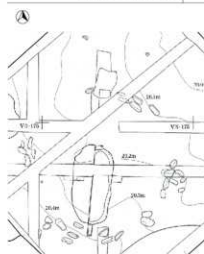
14(第25号環状配石墓)



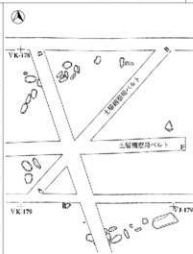
15(第29号配石遺構)



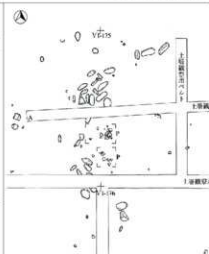
16(第30号配石遺構)



17(第31号環状配石墓)



18(第32号配石遺構)



19(第33号配石遺構)

※括弧内名称は既刊報告書の遺構番号



図2-17 環状配石墓2

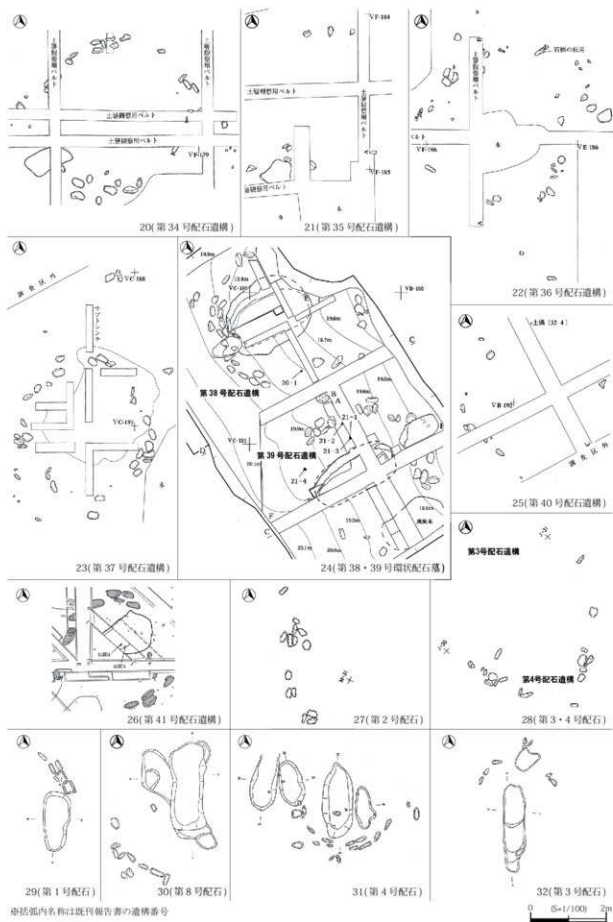


図2-18 環状配石墓3

第3項 埋設土器

1 埋設土器の分布

子供の墓と考えられる埋設土器は現時点で約890基検出されている。小笠原は、北地区を中心に集落内で3か所に集中していると指摘した(青森県2002)。1か所は北盛土内とその周辺、2か所目は北の谷東側の土坑墓列(第1項の①参照)につながるように列状に分布する、3か所目は西盛土内である。これらのほか北地区内では北盛土南側の掘立柱建物跡近辺、南盛土内、など散発的に検出されている。今回、1か所目の北盛土内とその周辺で検出された約500基に上る埋設土器について時期ごとに分布状況をまとめた。併せて、南・西盛土の分布状況と比較した。

(1) 北盛土内とその周辺(図1・2)

北盛土東側や北側から北の谷に向かう斜面に沿って土器が埋設されている(図1)。

時期別にみると(図2)、縄文時代前期では北盛土北側で広く分布している。縄文時代中期前葉の円筒上層a～c式期になると北盛土内を含め東から南東にかけて分布が広がり、埋設数も一気に増加する。埋設土器では円筒上層式が最も多く検出されており、型式が特定された埋設土器は円筒上層a～c式期のものが最も多い。中期中葉の円筒上層d・e式期では同じように北盛土近辺に分布するが同時期と特定された埋設数が減少する。中期後～末葉にかけては北盛土南側の掘立柱建物跡近辺に分布が見られる。

北盛土内及びその周辺(北東端VT-79～南西端VIN-95)で検出された埋設土器は約500基に上る。北盛土内でも100基を超える埋設土器が検出されているが、北盛土の拡大と埋設土器の分布が重なった結果とも考えられる(岡田2014)。

(2) 南盛土内(図1)

南盛土は、土層断面の観察による調査が中心である。部分的な調査ではあるが、南盛土の範囲で約30基の埋設土器が確認され、円筒上層式が中心である。南盛土範囲外では南東側で比較的埋設土器が検出されている。これについては、堅穴建物跡が多数分布していることから、これとの関連を考えなければならぬだろう。

(3) 西盛土内(図3)

西盛土内の中央付近では旧テニスコート建設予定地の試掘調査で埋設土器が集中して検出されている。第33・34次調査で16基が精査されており、縄文時代中期前葉の円筒上層a～c式期が中心である。埋設方法や土器内部の出土品は北地区に分布する埋設土器と大きな違いがないが、盛土内の極めて狭い範囲に集中していることから墓域として捉えることが可能である。

2 使用される土器と埋設方法

埋設土器全体をみると、使用される土器は煮炊きなどに使用した土器を転用し、埋設用として特別に製作されていない。完形の状態で確認されることは少なく、口縁部や底部が欠失し、周辺に接合できる破片を伴わないことから、意図的に一部を損壊した上で埋設されているものとみられる。中には

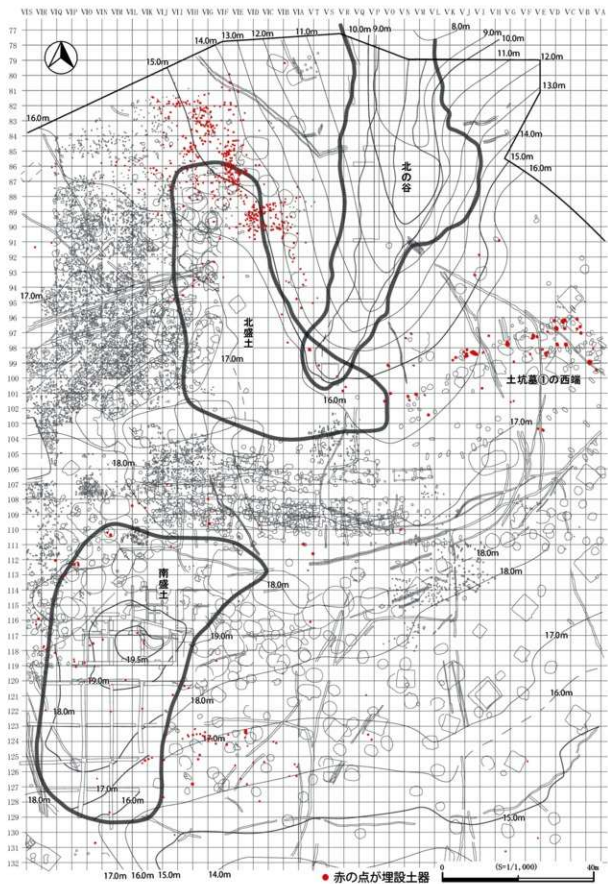


図 2-19 埋設土器の分布 (北盛土・南盛土周辺)

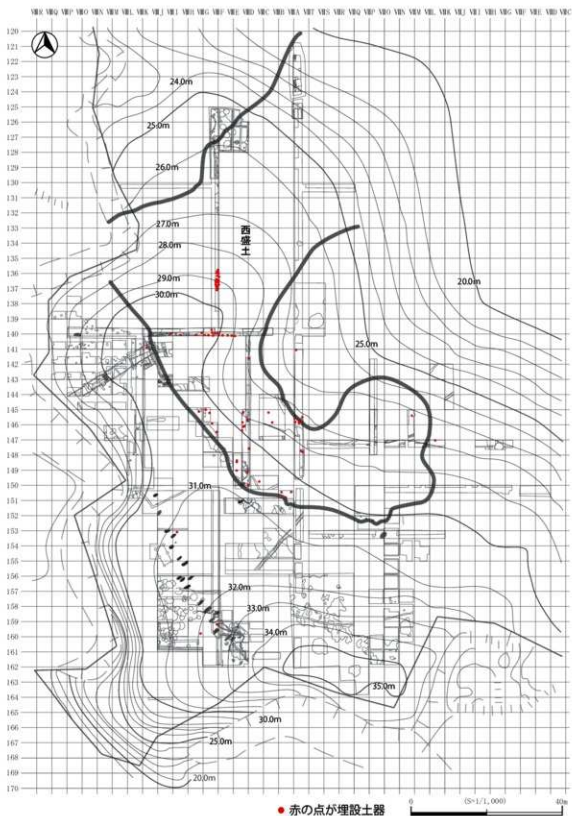


図 2-20 埋設土器の分布（西盛土周辺）

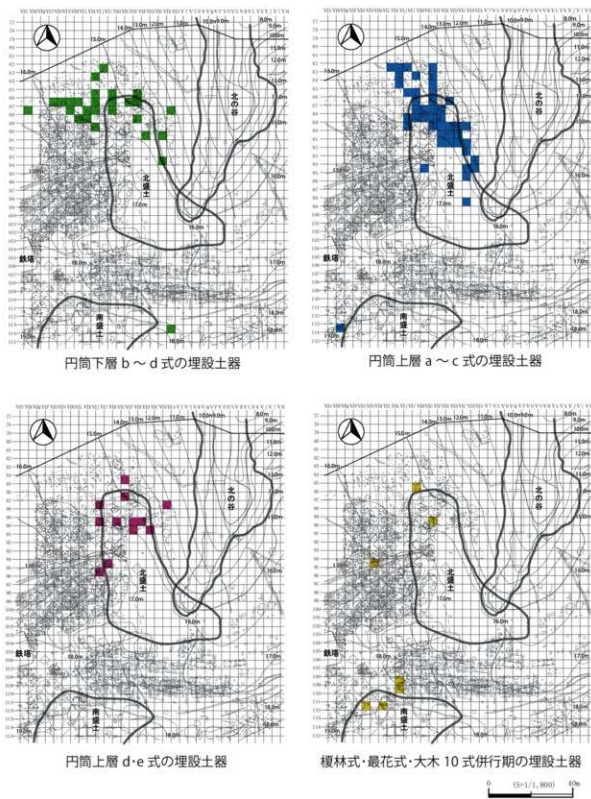


図 2-21 埋設土器の時期別分布（北盛土周辺）

図4のように側面(第3号埋設土器)や底部(第573号埋設土器)に穿孔されているものもある。

埋設方法は判明しているもので時期を問わず口の部分を上にして埋設する正立が多く、約97%が正立である。このほか、底の部分を上にして埋設し倒立して検出されるものが全体数の約3%の30基である。倒立の状態では埋設する土器は円筒下層d式期からみられ、この時期のものが10基検出されている。倒立させる土器は中期全般にかけてみられる。横位の状態では埋設するものも約1%の12基ある。埋設される土器は全体数でみると、単体で用いられるものが約99%で、2個体用いられるものが約1%の10基みられる(図5)。

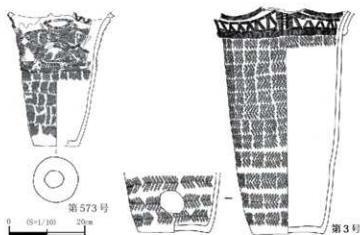


図2-22 穿孔された土器

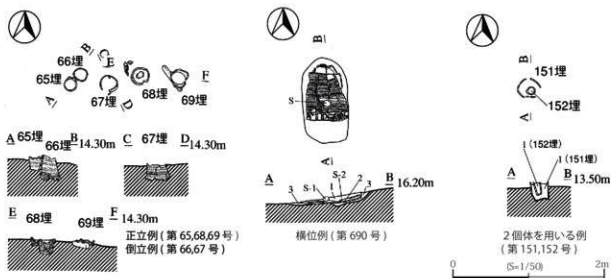


図2-23 土器の埋設方法

3 出土遺物

土器内部からの出土遺物としては礫や剥片などが多く、礫は握り拳大の大きさから小礫まで様々である。内訳は小礫、剥片、敲磨器類、石皿・台石類、石皿・転用敲石、砥石、北海道式石冠、軽石製品、剥片石器(石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、Rフレイク、Uフレイク)などである。土製品としてミニチュア土器が1点出土した例(第103号埋設土器)もある。また埋設した土器の上に石棒が横になった状態で出土した例もみられる。

4 埋設土器の時期

現在のところ、初現期の埋設土器は縄文時代前期中葉の円筒下層b式期であり、この時期に属する

埋設土器は約20基である。しかしながら、北盛土北側では多数の埋設土器が確認されており、堅穴建物跡の検出や捨て場などをみると初現期が遡る可能性も高い。円筒下層 c・d 式期になると数量が増え、約60基となる。縄文時代中期になると激増し、中期前葉から中葉の円筒上層 a～d 式期には、最も多くなる。円筒上層 e 式期になると、土器型式が分かるものが少なくなる。榎林・最花式期には、それまで北盛土の北側に集中していた埋設土器の分布範囲がなくなり、散発的に検出されるようになる。数量そのものが激減し、ほとんどみられなくなる。

(佐藤)

第4節 配石遺構

配石遺構は、18基が確認されている。なお、配石遺構として既に報告されているものに関しても、形態や周辺の遺構との関係等から環状配石墓と考えられるものは第3節第2項へ記載しているため、そちらを参照されたい。

1 配石遺構の分布と平面形

(1) 北地区

3基が確認されている。いずれも第1号道路跡とそれともなう土坑墓①に近接して構築されている。長楕円形の礫が主に用いられ、直線状を呈するもの(第6・9号配石)、集石状を呈するもの(第8号配石)が確認されている。

(2) 南地区

第2号道路跡とそれともなう土坑墓②に近接して11基が構築されている。

第2号道路跡北東側には、中央部に立石の可能性がある大型の礫があり、それを中心に半円形に礫が巡り、日時計形の組石となっている、第20・21号配石が確認されている。南東側には直線的に礫が配置される第26号配石や第27号配石が確認されている。第26号配石は直線的な4列の配置により構成されている。これらの4列の配石は、それぞれ規模が異なっているが、一定した間隔で並列することから、合わせて一つの構造を形成しているものと考えられる。第27号配石についても、第26号配石と同様の並列する列状の配置で構成される。第22・23号配石の平面形は環状配石墓に類似しているが、周辺を精査した結果、内部に土坑がともなわないため、配石遺構として本項で記載した。第5・6号配石は直線状で、類似した平面形を呈する。第18号配石は、立石の可能性がある大型の礫があり、その周辺に礫が集中する。

また旧西駐車場地区の土坑墓④に近接して4基が構築されている。第7号配石は平面形が「口」字状を呈する。

2 配石遺構の時期

配石遺構から出土した遺物はほとんどが確認面から出土しており、遺構の時期決定にはあまり有効でない。ただし、多数の配石遺構が確認されている南地区においては、多くの配石は第Ⅲa・Ⅲb層(※)の上に配され、上位に第Ⅱ層が堆積していることから、縄文時代中期中葉から後葉にかけて構築された可能性が考えられる。

(濱松)

※第13・14・17・20・23・26次調査(青森県教育委員会1999・2000)においては、第Ⅲ層が第Ⅲa層と第Ⅲb層に細分されており、縄文時代中期中葉頃までの堆積層であると設定されている。

第5節 土坑（貯蔵穴）

土坑は、これまでおよそ1600基が確認、報告されている。そのうちおよそ8割にあたる約1400基が縄文時代に帰属すると考えられている。なかには、楕円形を呈し土坑墓と考えられるものもあるが、それらについては第3節を参照されたい。本項ではそれ以外の土坑について、1 貯蔵穴と考えられるもの、2 土坑墓・貯蔵穴いずれにも比定できないものの2種類に大別を行い報告する。

1 貯蔵穴

貯蔵穴と考えられる土坑は、①底径が口径よりも2倍程度大きくなるもの、②底径が口径よりもやや大きくなるもの、③底径と口径がほぼ同じ大きさで、壁面が垂直に立ち上がるものがある。①と②については、断面形がいわゆる「フラスコ（袋）状」を呈する。②には、壁面崩落土と考えられる土が壁際に堆積している例も見られ、構築段階においては①のような形状を呈していた可能性もあり、①と②を明確に区別することは困難である。また、①～③に共通して、底面にピットや溝があるものも確認されている。

（1）貯蔵穴の分布（図2-25）

貯蔵穴と考えられる土坑は、北地区北側の緑辺部（第7鉄塔地区および第2次調査区など）、北地区南側の緩斜面上（旧都市計画街路予定地）、北地区西側の端部付近（第18・21・24・37次調査区など）の3か所に集中的に分布することがこれまでの調査によって確認されており、いずれも集落が営まれた台地の緑辺部に所在する。

北地区北側の緑辺部（図2-26、27）

計16基が貯蔵穴と考えられる遺構であり、①～③全ての形態が確認されている。第315号土坑では底面から円筒上層a式の完形土器が2個、入れ子状態で底面から出土したほか、第304号土坑では底面から脚付の石皿が出土していることから、前者は縄文時代中期前葉、後者は縄文時代中期中葉以降と考えられる。青森県東北町の古屋敷貝塚や青森県八戸市（旧南郷村）の畑内遺跡などでは、フラスコ状土坑から人骨が出土した例があり（上北町教育委員会1986・青森県教育委員会1994, 1995, 1997）、本遺跡例も、土坑墓として転用された可能性が考えられるが、今後更に検討する必要がある。

北地区南側の緩斜面上（図2-26、27、28）

計316基が検出され、うち52基が貯蔵穴と考えられる遺構であり、①～③全ての形態が確認されている。ここでは底面にピットを有するものが82基、溝を有するもの1基、ピットと溝を有するもの2基が確認されている。溝の用途としては「雨水等の排水のため」という可能性が指摘されている（青森県教育委員会1994）。各土坑の時期は不明だが、周辺から縄文時代中期中葉～後葉に属する土器が出土していることから、それに近い時期の可能性が考えられる。

北地区西側の端部付近（図2-25）

第18・21・24・37次調査において計3基が精査されており、これまでの調査では①・②の形態が確認されている。帰属時期は明確には判断できないが、堆積土中からは、円筒上層b式土器などの土器が主に出土しており、周辺の遺構との重複関係からも調和的であることから、縄文時代中期前葉には埋没していた可能性が高い。

（2）貯蔵穴の時期

貯蔵穴と考えられる遺構で明確に縄文時代前期に帰属するものは、これまでの報告されていないが、末精査である盛土下位等に存在する可能性がある。時期を決定しうる遺物が出土する例は少なく、その帰属時期については不明な点が多いが、円筒上層a式期には、北地区北側の第315号土坑のような断面形状がフラスコ状を呈するものが確認されることから、本遺跡においては、少なくとも、縄文時代中期前葉頃にはこのようなタイプが存在すると考えられる。

断面形状がピーカー状を呈し、口径と底径の差が少ない大型のものは、北地区南側の南の谷に面する緩斜面上に多く構築される傾向が見られる。周辺には縄文時代中期中葉～後葉に属する遺構が主に構築されていることや第304号土坑の底面から脚付の石皿が出土していることなどから、主に縄文時代中期中葉～後葉頃に構築されたと考えられる。

2 その他の土坑

（1）竪穴遺構（図2-28）

北地区南側の緩斜面上および北地区西側の端部では、大型の竪穴遺構が確認されている。平面形等は竪穴建物跡に類似するが、炉の存在や底面の硬化等の居住痕跡が見られないこと等から、本項で扱った。底面にピットを有する例や、テラス状の施設を持つ例が確認されている。

（2）その他の土坑

その他の土坑としては、円形・楕円形・不整形のものなどがこれまでの調査で確認されている。全体として、縄文時代前期に比定されているものは少なく、縄文時代中期に比定されているものが多い。

（濱松）

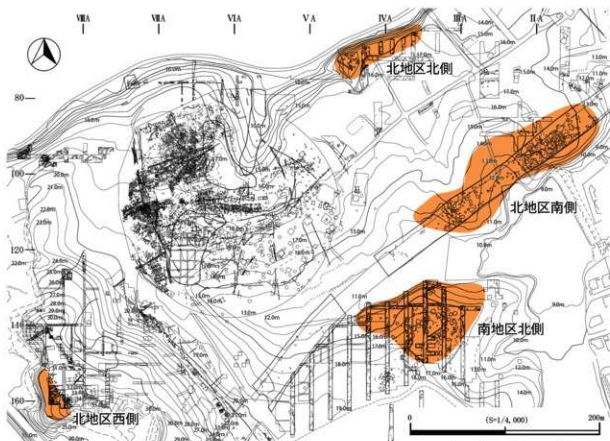
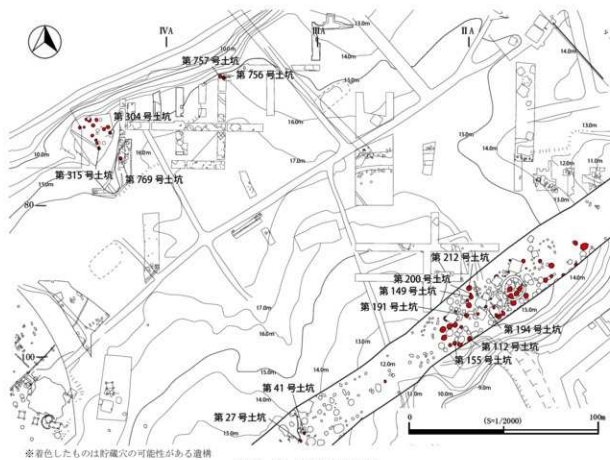
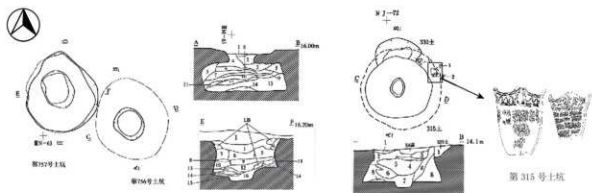


図 2-25 土坑の分布

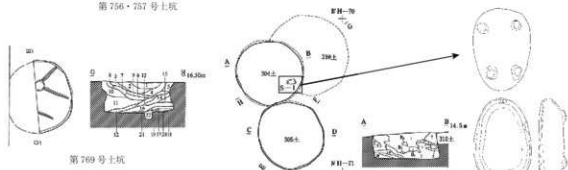


※着色したものは貯蔵穴の可能性のある遺構

図 2-26 北地区の土坑



第756・757号土坑

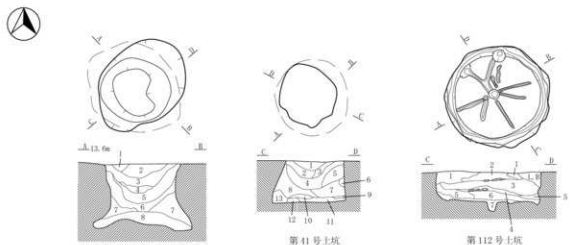


第769号土坑

北地区北側の貯蔵穴

※遺物のスケールは 1/10

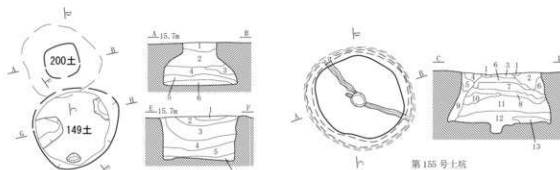
0 (S-1/100) 2m



第27号土坑

第41号土坑

第112号土坑



第149・200号土坑

第155号土坑

北地区南側の貯蔵穴 1

0 (S-1/100) 2m

図2-27 土坑(貯蔵穴) 1

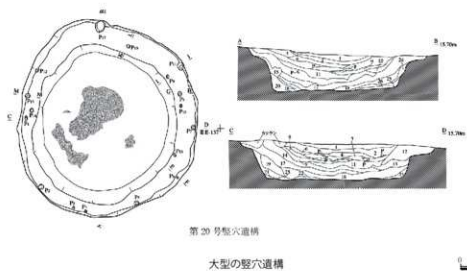
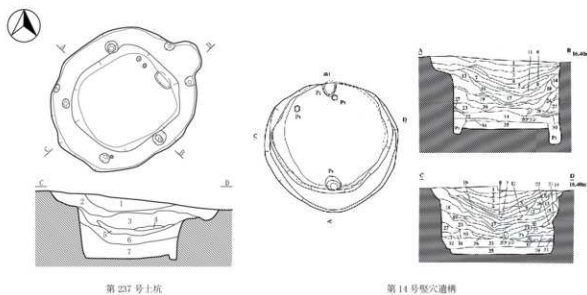
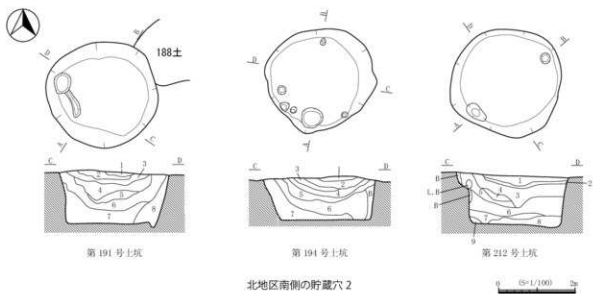


図2-28 土坑(貯蔵穴) 2

第6節 竪穴遺構（粘土採掘坑）

地面を掘削した竪穴状を呈する遺構ではあるものの、用途不明なものを一括して呼称した。全て北地区で、東西に延びる台地の中央部分に分布する。これらの中には粘土採掘坑の可能性のあるものも含まれる。（巻末の掲載遺構一覧表参照）

いずれも平面形は不整形、瓢箪形、（長）楕円形等であり、共通性はない。規模は大小あるものの、深さが1m未満となっている。中には第1号竪穴遺構（以下、第○号）や第2号のように、底面に円形の掘り方が連続または重複しているものがあり、壁が大きく湾曲し、断面が袋状になるものがある。堆積土は人為的な埋め戻しであり、壁の崩落土の堆積も一部に見られる。

第1号は第Ⅱ層を掘削中に平面形を確認しており、時期は層序から縄文時代中期後半の可能性が高い。他は畑の耕作等により攪乱を受けており、地山である第Ⅴ層上面で確認した。遺構との重複関係からは第1号は中期の掘立柱建物跡より古く、第2号・5号は列状に配置された前期末～中期の土坑墓より新しく、第7号は小児用埋葬施設である中期中葉の埋設土器よりも古く、第9号は中期の竪穴建物跡より新しいことが明らかである。

出土遺物は巻末の表に示すように、縄文時代中期前半から後半にかけての土器が出土している。これらから大まかに、中期前半・・・第3号、第6号、第7号、第10号、中期後半・・・第1号、第2号、第8号、第9号、第13号、時期不明・・・第4号、第5号に大別でき、本集落の最盛期と重なる時期である。

これら竪穴遺構は平面形に規格性はないものの、いずれも第Ⅵ層の千曳浮石相当層を堅掘りし、その下層の第Ⅶ層の褐色火山灰層に達した後横掘りされた形跡が特徴としてみられる。特に第1号・2号に顕著である。粘土採掘坑とされている多摩ニュータウンNo.248でも同じような特徴が見られることから同様の可能性を考えるものである（東京都生涯学習文化財団2000）。

しかし、松本健速（東海大学）の胎土分析によるとその可能性は低いとされている（松本2003）。松本は出土土器や土偶及び第1号近くから採取した千曳浮石相当層、その下層の黄褐色火山灰及び白色系火山灰を分析したところ一致するものはなく、少なくともこれらは土器の素地として使用されていないとした。むしろ、千曳浮石相当層より数m下に堆積している灰白色粘土層が利用されたものとしている。なお、この灰白色粘土層は沢や南北の谷などで比較的容易に採取、採掘できるものである。

現状で竪穴遺構が全て粘土採掘坑であることを積極的に支持する資料は少なく、胎土分析の結果とも整合性が認められない。しかしながら、第1号に見られるように掘削が長期間・大規模に行われたことについては留意すべきであり、粘土採掘坑に目的や用途を限定することなく、例えば小林克の指摘するように遺体の一次処理のための施設との説も視野に入れて検討する必要があるかもしれない。

（岡田）

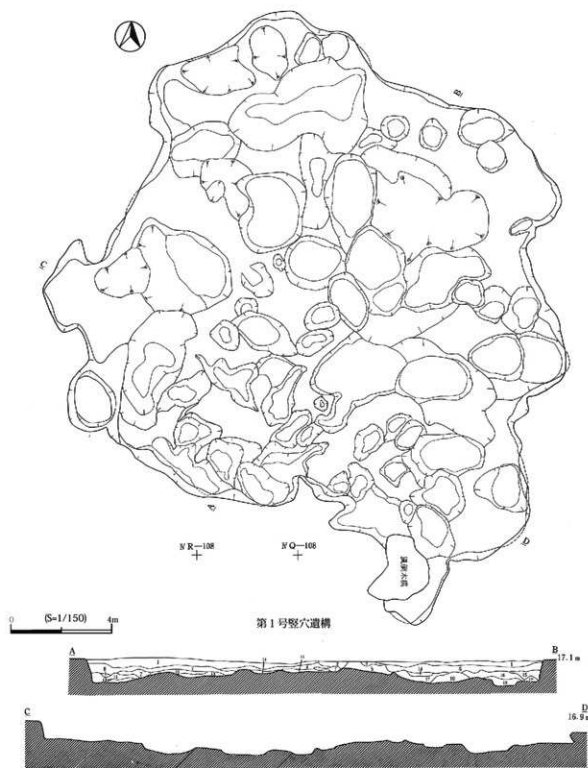


图 2-29 竖穴遺構 (粘土採掘穴)

第7節 水場遺構

近野地区からトチの水ざらし場遺構が検出され、第1号木組遺構1基、トチノキ種皮片集積遺構1か所が構成される。トチの実の加工に関するものである。

第1号木組遺構は南の沢に連なる近野地区の谷は西側斜面の支流（支流3）と本流との合流点に構築されている。支流3は谷底幅50cm前後のV字谷で急傾斜で直線的に下降する。木組遺構は長軸1.6m、短軸1mの長方形である。4辺に板を設置し、板の内側を4本の杭を打ち込んで固定し、外側に加工材・自然木・礫を据えて固定させている。

木枠は4辺とも湾曲した板材を使用している。東・西・北辺は板材を横方向に設置しているが、南辺は縦方向に2枚の板材を設置している。

構築方法は内側の杭4本と南辺の板材を打ち込み、次に東・西辺の板材を横に設置する。これらの板材を外側から固定した後、北辺の板材を設置し再び外側から固定している。

構成材は、22本の加工材と2本の自然木と礫石器1点を使用している。トチノキ・サワグルミ・カバノキ科を除きすべてクリの木である。

木組遺構の使用方法は、遺構の位置と水との関係から想定される。支流3からの湧水を利用するためにこの位置に木組は設置されたものと考えられる。木組の中で支流側の板材が縦方向に打ち込まれているのは、支流からの濁流等の強い水圧への対抗策として強く打ち込まれ、木組に強度を与えたものと考えられる。木組遺構は貯水場として十分機能するものと考えられる。

構成材3本の年代測定を行い、3090～2890calBC、3270～3240calBC・3110～2910calBC。周辺の出土遺物と年代測定から縄文時代中期中葉に構築されたものと思われる。

3620～3580calBC・3530～3350calBCの測定値が得られた。

第1号木組遺構より約3m北東からトチノキ種皮片集積遺構が検出された。谷本流の西岸寄りに位置しており、トチノキの破片が密になり、トチノキ破片のみ厚く堆積する箇所が確認されている。土壌中の種実類の分析から、トチノキ種皮片を主体とする層は、下層と比べて種実類の出土数が少なく、トチノキ種皮を廃棄した状態がそのまま残っていた可能性が高い。

トチノキ種皮片採取を目的として土壌を全量採取したところ、トチノキ種皮片は6.694.5gで、トチノキ種子個体数に換算すると1,704個分となる。遺構上面に2個体分の縄文土器が出土しており、大木10式の深鉢と中期後半の深鉢が出土した。このほか、トチノキ種皮片の年代測定を上面のトチ層と下位層から出土した種皮片で行った。推定年代は上面が2880～2560calBC・2560～2520calBC、2860～2800calBC・2760～2580calBC、下位が3340～2910calBC、3270～3240calBC・3110～3000calBC・2980～2940calBCであった。

出土遺物と年代測定から上面のトチ層は縄文時代中期末、底面付近は中期後半のものと思われる。

(佐藤)

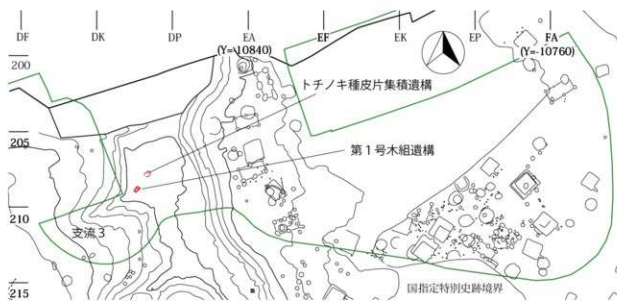


図2-30 水場遺構の周辺

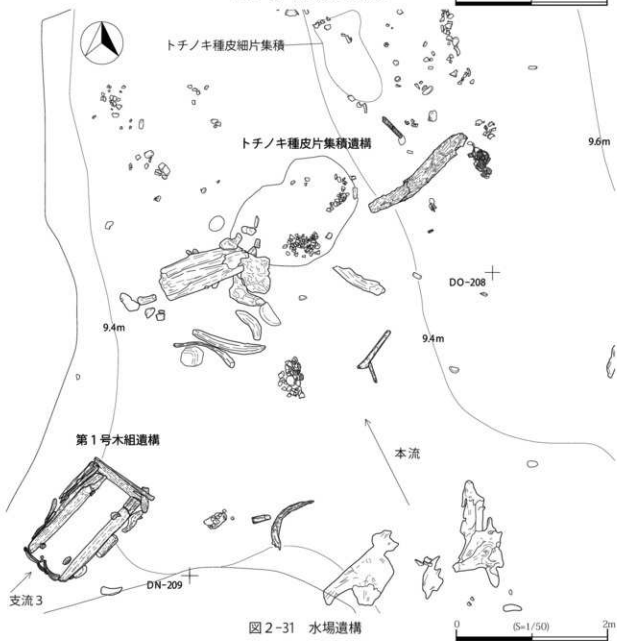


図2-31 水場遺構

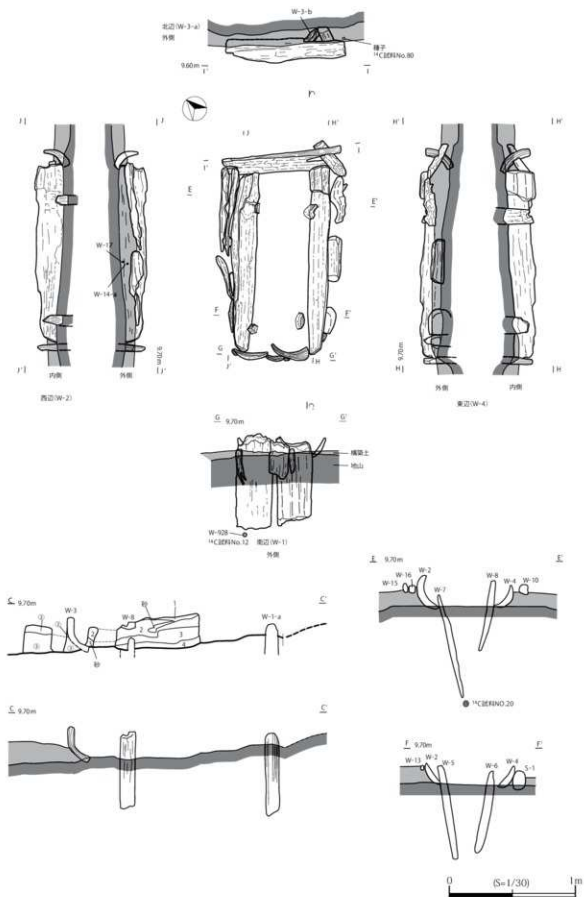


図 2-32 木組遺構

第8節 捨て場と盛土

第1項 捨て場（縄文時代前期）

縄文時代前期の捨て場は、沖館川に面した北地区の台地斜面、北の谷、廃絶した竪穴建物跡のくぼみなど、周囲に比べ低い場所が主に利用されており、地面上にマウンド状となる盛土は縄文時代中期以降に顕在化する。台地斜面や北の谷では、低湿地が捨て場となっており、有機質遺物が良好な状態で残存している。

1 北地区北縁（第6鉄塔地区）の捨て場

第6鉄塔地区は、沖館川に面した台地北斜面に位置する。捨て場は、上層（第Ⅲ層）が中期の土砂を主体とした廃棄層で、前期の捨て場は標高が8～12mの第Ⅳ層以下に形成されている。第Ⅴ層は3層に、第Ⅵ層は2層に細分し、小文字のアルファベットを付した。

第Ⅴb層下部（円筒下層 b_2 式期）にはほぼ土器のみの層が形成され、それに覆われるように、以下の第Ⅴc・Ⅵa・Ⅵb層（円筒下層 a 式～ b_1 式期）の層では、型式ごとに把握できる状態で遺物が出土した。

第Ⅴc層からは若干の湧水があり、骨角器がわずかに出土し、第Ⅵa・b層では湧水が多くなり、特に第Ⅵa層からは骨角器、木製品等の有機質の人工遺物や、獣・魚骨、植物遺体などの自然遺物も良好な状態で出土した。なお、第Ⅵa層の上面には、間層26と称したエゾニワトコを主体とした種子密集層が形成されている。第Ⅴb層下部から第Ⅴc層との層理面では土器が折り重なるように出土し、その厚さは10～15cmほどにもなる。出土土器は円筒下層 b_2 式期のものである。第Ⅴc層出土土器は円筒下層 b_1 式期、第Ⅵa・Ⅵb層出土土器は円筒下層 a 式期のもので、土器の型的にもまとまりのある資料である。



図2-33 第6鉄塔地区の位置

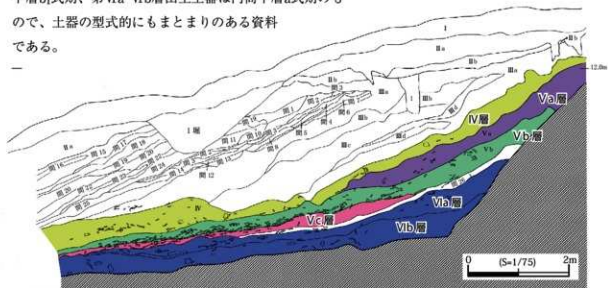


図2-34 第6鉄塔地区の層序

石器の出土傾向では、いずれの層も石匙とスクレイパーが多く、両者で全体の5～6割を占める。しかし、第Vb層では、下位の古い時期の層から漸増していた敲磨器類が約2割を占めるようになり、石匙・スクレイパーの割合が減る。また、前期後半になるにしたがい、半円状扁平打製石器や挟入磨製石器の割合が徐々に増加するようになる。

有機質遺物は、第VIa・VIb層から多量に出土した。骨角器、木製品、植物質製品などがある。骨角器は、針が多く、錐、釣針（単式・組み合わせ）、刺突具、銛頭、鹿角の根元を利用したハンマー、装身具類（ヘアピン、椎骨や牙を利用した垂飾品、貝輪など）、鯨骨製の骨刀、3方向から溝を切り込んだ加工途中の鹿角などがある。骨角器の残存状況は非常によい。木製品では漆塗り容器（鉢・台付き皿）、ヘラ状木製品、棒状木製品など、樹皮や繊維製品としては、高さ16cmほどの網代編みの編籠、編布の断片、組紐、繊維を結んだものなどがある。

土・石製品では、ミニチュア土器、球状耳飾り、岩偶、垂飾品などが出土している。

これらの上層の縄文時代前期の層である第IV・Va層では、円筒下層a～d式土器のほか、石器、土・石製品がある。土器は石器では第Vb層に比べ石匙やスクレイパー類の割合がやや減り、敲磨器類や挟入扁平磨製石器の比率がやや高くなる。土・石製品では、ミニチュア土器、土偶、楕円形状の石製品がある。

2 北の谷の捨て場

北の谷は、VR-100付近が谷頭となり、沖館川に向かい開く谷である。谷底の標高は95ラインで約8m、80ラインで約4mと低くなり、沖館川へと接続する。下位ほど谷幅は広がるが、83～90ラインでは、東側に入れたように広がる。谷の西側の台地平坦面には北盛土が広がり、さらに谷頭を覆う。

第I層は表土、第II層は黒色土で、この層中に形成された白頭山火山灰層までは重機で除去し、以下の第III層以下を精査の対象とした。第III層は中期から前期の層序で、3層に細分し、それぞれ小文字のアルファベットを付し、さらに第IIIc層は算用数字を付して13層に細々分した。ただし、発掘調査の中止もあり、遺物の出土が確認されたのは第IIIc-6層までである。

それぞれの層からは円筒下層式期や上層式期の土器が出土し、上部の台地平坦面からの流れ込みなどによるものと思われる。しかし、第IIIc-3層は円筒下層c-d式、第IIIc-4層は円筒下層b-c式、第IIIc-5層は円筒下層a-b式土器が主体となり、漸移的に時期変遷する。

捨て場のほか検出した遺構としては、杭列がある。VP-92に位置し、谷底の東側に土砂を約60cm盛り土し、谷の底面からは約1.5m比高差で、幅1～2mの平坦面を作出している。平坦面には10本ほどの杭がほぼ等間隔に打ち込まれている。掘り方は確認されず、いずれの杭も斜めの状態で検出された。樹種は1本のみオニグルミで、そのほかはクリである。また、盛り土した法面には円筒下層b式期などの土器片が密着したように出土し、崩落防止のために貼り付けられた可能性もある。盛り土された平坦面は道路としての機能が考えられ、杭は土留めのためのものと考えられる。杭列や平坦面として確認されたのは長さ3～4mほどである。機能が停止したとみられる中期以降の谷への水・土砂の流入により浸食されているが、道路跡として本来は長く延びていた可能性がある。

出土遺物は、土器、石器のほか、骨角器や木製品等の有機質遺物も多量に出土した。骨角器は針、

錐、釣針（単式・組み合わせ）、銛頭、刺突具などの利器のほか、ヘアピン、牙製装飾品などの表身具類、骨刀や棒状製品などの用途が不明なものがある。木製品では、片口容器、漆塗りの容器や把手、掘り棒、杭などのほか、用途が不明なヘラ状木製品、棒状木製品がある。

繊維質遺物としては、編組製品では、網代編みやもじり編み、ゴザ目編みの製品の一部や、樹皮素材とみられるものがある。

土・石製品では、ミニチュア土器、土器片利用円盤、岩偶などが縄文時代前期のものだと判断される。

また人骨も出土しており、成人の中手骨、膝蓋骨、10歳前後の下顎骨、幼児の上腕骨や壮年や年齢不詳の歯などがある。

遺物のほかに、土壌中には多量の動植物遺体が出土した。植物遺体ではクリ・クルミが目立ち、木材でもクリ、オニグルミ、アスナロが自然木、木製品も多く、第6鉄塔地区と北の谷では調和した結果となっている。第6鉄塔地区では層を成したニワトコの種子は、北の谷でも多量に含まれ、クワ属、キイチゴ属、キハダ、ブドウ属が伴出するのも共通する。

動物遺体のうち獣骨ではムササビやノウサギが多く、シカ・イノシシは少ない。鳥類ではカモ・ウ類が多く、魚類ではブリ属やヒラメが多い。

また、ササゲ属アズキ亜属、フクロウ類やカラス類、頭足類の頸板、甲殻類の口器など、第6鉄塔地区では得られなかった知見もある。

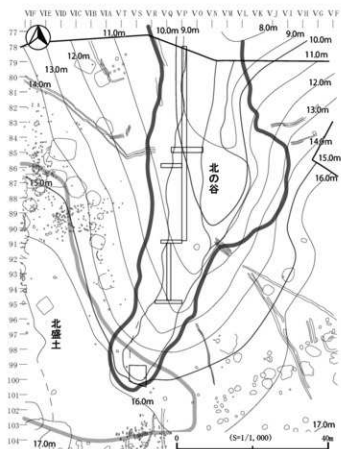


図 2-35 北の谷

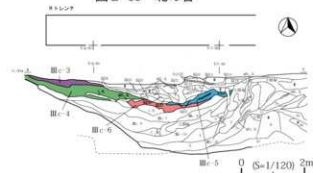


図 2-36 北の谷(トレンチ)の土層断面



図 2-37 北の谷の杭列

3 竪穴建物跡の堆積土中の捨て場

廃絶後に捨て場が形成された竪穴建物跡がある。第120号・第163号竪穴建物跡のように、長径10mを越える大型竪穴建物跡が使われる場合もあるが、長径が5m前後のものが利用されることも多い。

確認されているものは円筒下層b式期以降で、第101・313・388・456号竪穴建物跡では円筒下層b₂式期、第284号竪穴建物跡では円筒下層b₂~c式期、第163号竪穴建物跡では円筒下層c式期、第120号竪穴建物跡では円筒下層b~d₁式期、第290号竪穴建物跡では円筒下層d₁式期を主体として捨て場が形成された。それぞれの捨て場では土器や石器が出土したほか、岩偶や円形の土製装身具が出土したものもある。

(小笠原)

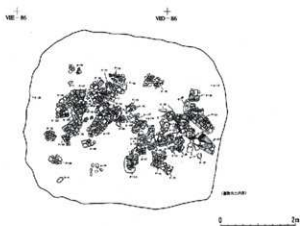


図2-38 竪穴建物跡の堆積土中の捨て場の出土状況

第2項 盛土（縄文時代中期の捨て場）

北地区では、縄文時代中期の捨て場が4か所確認されており、いずれも土器・石器などの遺物とともに、大量の土の廃棄がみられる。特に、旧野球場建設予定地と遺跡西側の丘陵上に位置する3か所の捨て場は、①炭化物や焼土、二次堆積のローム質土などによる人為的な堆積層からなること、②自然要因による地形改変の低い場所が周辺地形とは異なる状態を示すこと、③一定の範囲に限られた区域が繰り返し継続的に廃棄の場として使用されていること、④大量の遺物が包含されることといった条件（青森県教育委員会2008）を備えることから盛土と呼称している。

1 南盛土

北端VIM-109、東端VIC-112、西端VIR-124、南端VIM-129グリッドに位置する（図2-39）。低位段丘を開析する小河川（南の谷）の北側、標高約16～20mの台地平坦面から南向きの緩斜面に形成されている。道路跡や土坑墓列にも近接し、南端は、南の谷の谷頭部分を覆うように土層の堆積が広がる。南北70m、東西40m、最大厚2.1mで、北側にやや広がりを持ち、台形状を呈する。平面積は約2,860㎡である。年代は、縄文時代中期前葉～中期後葉の円筒上層a～e式・榎林式・最花式期で、各時期の堆積層の厚さはほぼ一定である（図2-41）。

形成初期段階にあたる最下部層には、炭化物、焼土、ロームが純層に近い状態で堆積している。堆積土層中にみられる焼土の多くは、廃棄によるもので、その場で火を焚いたと考えられるものは少ない。トレンチ断面に観察された堆積層の層序から、西から東に向かって範囲が拡大した様子が窺える。また、土層断面に厚さ10cm程度の薄く平坦な堆積の単位がみられ、層面に土壌形成がみられないことから、廃棄された土層は頻繁に整地されていた可能性がある。堆積土層中には炭化物、焼土ブロック、ロームブロックが混じり、特に、炭化物は大量に含まれている。焼土層には、炭化した植物遺体と焼骨片が混じる。

他種遺構との重複関係をみると、盛土の下部（第IV層上面）に土坑、埋設土器、焼土遺構が検出されており、盛土の土層中には、土坑と埋設土器がみられる。また、30cm四方にまとまる礫の集積（配石遺構）が4トレンチ57層等で3か所検出されている。

遺物は、土器・石器・土製品・石製品・骨角器・動植物遺体が出土している。土器は、円筒下層a式～最花式が出土しており、前期の資料は少なく、特に円筒下層c・d式はほとんどみられない。多くは、中期のもので、個体ごとにまとまった状態で出土している。石器は、石鏃・石槍・石匙・石錐・石筥・不定形石器・異形石器・石核類・磨製石斧・敲磨器類・半円状扁平打製石器・挾入扁平磨製石器・石冠類・擦切具・石錘・砥石・石皿・台石・石棒類・角柱類・軽石類が出土している。石槍や剥片・砕片がまとまって出土する様子も確認されている。中期中葉の層で検出された碎片集中は直下に厚さ3cmの砂層が堆積しており、両面加工石器の調整剥片で構成される（齋藤2015）。これらは、遺棄された石器製作残滓の可能性も考えられる。土製品は、土偶334点をはじめとし、ミニチュア土器・三角形土製品・装飾品類（有孔土製品類）・円盤状土製品・土器片利用円盤・クルミ押圧土製品・棒状土製品・土冠・焼成粘土塊が出土している。ミニチュア土器は、完形品が少なく、欠損品が大半を占める。石製品は、珠状耳飾・石製装身具（有孔石製品）のほか、環状または容器状に加工されたもの・ヒスイ製品・青竜刀形石器の可能性のあるもの・軽石製品などが出土している。骨角器は、鯨骨製品が焼け

て白色化した状態で出土している。植物遺体（吉川2010）は、中期前葉から後半の層より、オニグルミ、クリ、トチノキが出土しており、コナラ属、キハダ、ウルシ属、ヒエ属もみられる。また、堆積土の花粉分析が実施されているが、検出率はあまり高くない。6トレンチの最下部（P6地点No.10）でクリ属がやや多く検出されている（吉川ほか2006）。

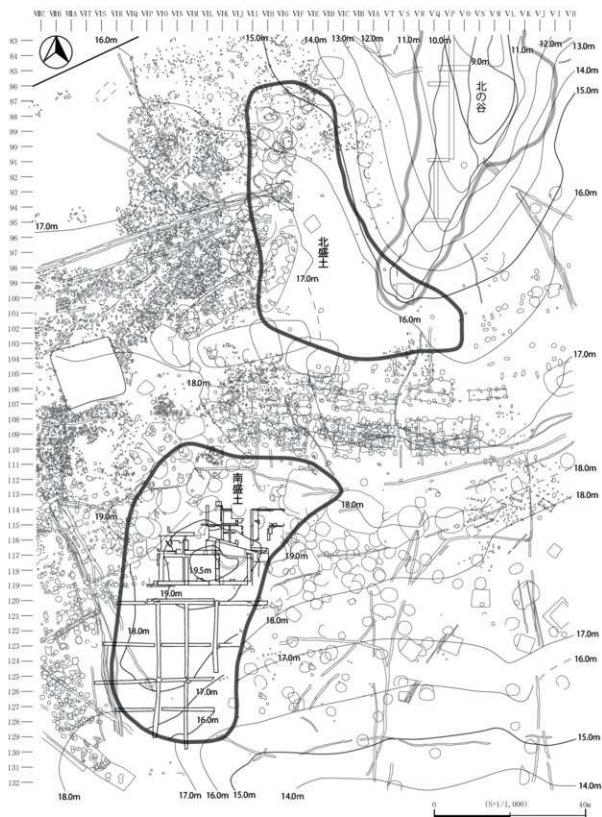


図 2-39 南盛土・北盛土平面図

2 北盛土

北端VF-85、東端VO-101・102、西端VI-87、南端VA-104グリッドに位置する(図2-39)。低位段丘を開析する小河川(北の谷)の西側、標高約17mの台地平坦面から東向きの緩斜面に形成されている。住居跡群や埋設土器群に隣接し、道路跡、土坑墓列にも近接する。南東端は、北の谷の谷頭部分を覆うように層が堆積し、南北約80m、東西約60m、最大厚1.8mで、南側がやや広がる台形に近い形状を呈する。平面積は約2,300㎡である。年代は、前期末葉～中期後葉の円筒下層d₂式～円筒上層e式・榎林式・最花式期で、各時期の土層は、平面的に位置をずらしながら累積している。

盛土の堆積層の下位には前期の住居跡が多数確認されており、それらを埋める形で小規模な捨て場(第Ⅲb層)が複数の地点に形成されていたと考えられる。前期末葉から中期後葉の時期に、平坦地の遺構空白部分にも廃棄域が広がり、大規模な遺物包含層に発達したと推定され、土層断面の層序確認から、南西から北東方向に範囲拡大した様子が窺える。

重複する他種遺構としては、盛土の周辺および範囲内に竪穴建物跡、柱穴、埋設土器が検出されている。柱穴は盛土の上部から、埋設土器は、盛土の土層中に掘り込みがみられる。

堆積土は、炭化物、焼土、ローム質土などの薄層を主体とした明るい色調の上部層(第Ⅲa層)と、炭化物をやや多く含む暗褐色シルト質の下部層(第Ⅲb層)に分かれる(図2-41)。上部層では、厚さ10cm程度で薄く平坦な堆積がみられる箇所が多く、大形の土器片を含み、復元個体が大量に含まれる。更にその中でも、ほぼ同じ厚さで堆積が進行する部分と比較的規模の大きな土層が堆積する部分とがあり、後者は、特に上部層の上位にみられる特徴である。下部層は、層の厚さが相対的に厚く、土器は、破片が主体である。上部層の年代は円筒下層d₂～最花式で、下部層の年代は前期である。大量の炭化物片、焼骨片、焼土ブロック、ロームブロックが層中に含まれる。

遺物は、土器・石器・土製品・石製品・骨角器・動植物遺体が出土している。土器は、円筒下層a～上層e式・榎林式・最花式が出土している。第Ⅲa層は円筒上層式が、第Ⅲb層は円筒下層式が中心である。特に第Ⅲa層からは、ほぼ完全な形に復元される土器が大量に出土している。また、それらに混じって北陸地方の朝日下層式や新保式に類似したものが少量出土している。石器は、石鏃・石槍・石匙・石筥・不定形石器・異形石器・石核類・ピエスエスキュー・磨製石斧・敲磨器類・半円状扁平打製石器・挟入扁平磨製石器・石冠類・石錘・砥石・石皿・台石類・石棒類・角柱類・擦切具が約15,000点出土している。器種で最も多いのは、石鏃で3,187点出土している。土製品は、土偶・ミニチュア土器・三角形土製品・土製垂飾・土製耳飾・土器片利用円盤のほか、イモガイ形・円盤状・クルミ押圧・棒状・三角柱状・石棒状・動物形・球状・管状の土製品がみられる。特に土偶588点とミニチュア土器940点は、遺構ごとの出土量としては最多である。石製品は、岩偶・块状耳飾・石製垂飾(有孔石製品)のほか、容器状・棒状・円盤状に加工されたもの・石冠類・ヒスイ製品・軽石製品などがみられる。また、赤色顔料塊や焼成粘土塊も出土している。骨角器は、全て被熱により白色に変色しており、鋸頭・刺突具・ヘアピン・棒状製品・骨刀などが出土している。また、堆積土壌に含まれる植物珪酸体が分析されており、クマザサ属型をはじめとするタケ類が多く検出されている(外山1995)。

3 西盛土

東端ⅧL-150、西端ⅧM-136、南端ⅧO-152グリッドに位置する(図2-40)。北端は未確認であるが、121ライン以北となることが確実である。標高約20~31mの中位段丘から低位段丘にかけての緩斜面、道路跡と土坑墓列に隣接する位置に形成されている。廃棄層は、谷地形の落ち際に集中しており、中心部分は浸食の影響によるのか、遺物やローム質土の堆積がほとんど確認されていない。長さ120m以上、幅60m以上、最大厚1.8mで、平面形は北東側に開く半環状である。年代は、前期末葉~中期末葉の円筒下層 d_2 式・円筒上層 a_1 ~e式・最花式・大木10式併行期で、中心部とみられる第33次調査Aトレンチでは、中期前葉から中期中葉の土層が厚く、端部とみられる第33次調査Cトレンチでは、中期後葉から末葉の土層が厚く堆積していた。

第33次調査区Cトレンチ、第34次調査区E・Iトレンチでは、盛土端部の廃棄層の下位から前期末葉の堅穴建物跡が検出されている。いずれも大量の遺物と土の廃棄がみられ、土層中には炭化物和ロームブロックが大量に混じる。土偶やミニチュア土器などの土製品も多く出土しており、南盛土や北盛土の特徴と共通点が多い。前期末~中期初頭期にローム質土の廃棄が上述した堅穴建物跡の周辺で行われるようになり、廃棄層の累積が徐々に発達していく。西盛土を構成する各廃棄層の起点は、丘陵頂部から斜面下方に推移しており、層序と土層断面の観察からも、南西から北東方向に範囲が拡大したことがわかる。層中に含まれる遺物も丘陵頂部側(第33次調査区Aトレンチ)より斜面下方側(第33次調査区B・Cトレンチ、第17次調査区)でより新しい時期が出土する傾向が確認されている。

地点ごとに堆積層の様相は異なるが、確認された中で最も層の堆積が厚い部分は第33次調査区Aトレンチ周辺で、暗褐色土を主体とする上部層(第Ⅲ層褐色)と黒褐色土を主体とする下部層(第Ⅲ層黒色)にわかれる(図2-41)。上部層は、各堆積層が約15cmの厚さで60cm~6mにわたり、薄く均等に敷き均したような状態で堆積する部分とローム質土の純層、廃棄された焼土層、炭化物・灰層などがあり、層理面に土器が個体ごとにまとまった状態で出土する傾向がある。また、埋設土器と焼土遺構(火を焚いた跡)の形成が廃棄土層を介在させながら累積している部分もみられ、同一地点で回帰的な場の利用がなされた様子をうかがうことができる。下部層は、炭化物粒と基本土層の第Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ層由来のロームブロックが多く含まれており、それらの形状をみると西から東(丘陵頂部から斜面下部)に向かうにつれて丸みを帯び、細粒化する傾向がみられる。また、層の厚さは約60cm程度と、単位が上部層よりも大きく、堆積が短期間で完了した様子がうかがえる。

他種遺構との重複関係については、盛土の堆積層の上部で、堅穴建物跡が検出されている。特に第33次調査区Aトレンチ西端には中期前葉から中葉にかけての堅穴建物跡4棟が重複して検出されており、盛土の廃棄層と重複した関係をもつ。ここでは、掘方の構築と廃絶後の窪地への土の廃棄が繰り返されたことで床面が嵩上げされていった様子が観察される。また、盛土の堆積土層中には、埋設土器が複数検出されており、前後の層位には焼土遺構がみられる。埋設土器は、盛土の範囲内に多く、範囲外には広がらない。また、第33次調査区Cトレンチ、第34次調査区E・Iトレンチでは、盛土の堆積層の下位より、前期末葉の堅穴建物跡が3棟確認されている。

遺物は、土器・石器・土製品・石製品が出土している。土器は、円筒下層 d_1 ~上層e式・榎林式・最花式が出土している。下部層(第Ⅲ層黒色)は円筒下層 d_2 式、上部層(第Ⅲ層褐色)は円筒上層式が中心である。円筒上層e式以降は遺物量が減少し、碎片が多いが、中期前葉の土器は個体がまとまった状

態で出土する傾向が強い。石器は、石鎌・石槍・石筥・石錐・石匙・異形石器・不定形石器・磨製石斧・敲磨器類・半円状扁平打製石器・挟入扁平磨製石器が出土している。特に、不定形石器・敲磨器類・石鎌が多い。土製品は、土偶・ミニチュア土器・土製耳飾・円盤状・石斧形・球状・土冠・土器片利用円盤・クルミ押圧土製品・焼成粘土塊などが出土している。土偶やミニチュア土器の多くは破片の状態で出土しており、ミニチュア土器や埋設土器の内部にロームが充填されているものもみられた。石製品は、垂飾品・有孔石製品・大珠・石製容器・ヒスイ製品類・軽石製品が出土している。

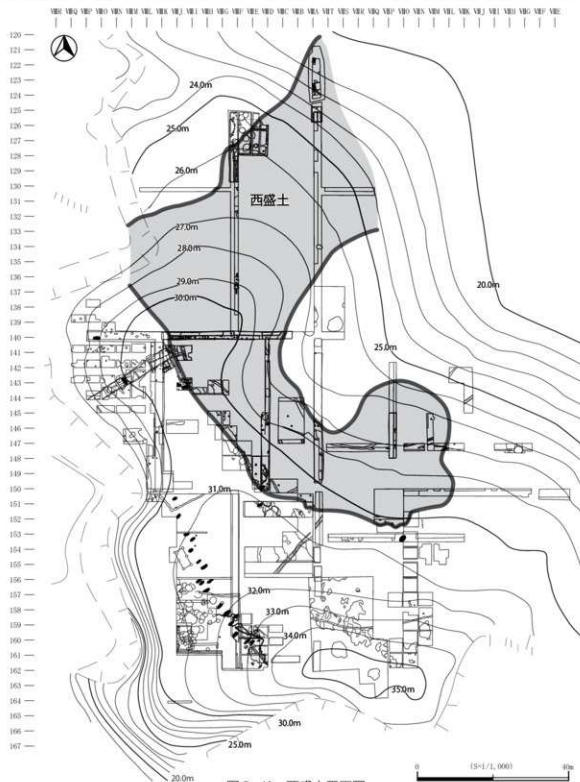


図2-40 西盛土平面図

長-18.50m

15トレンチ



16トレンチ

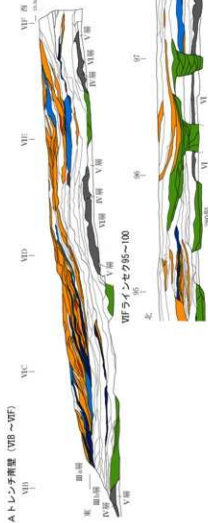


17トレンチ



南盛土 (各層の年代)

- 地山ローーム高質の土層
- シルト質頁土に炭化物が多量に混入した土層
- 炭化物の集積層
- 粘土が基質の土層
- 膠状土層部などの過積層粘土層
- 第1砂層



Aトレンチ類型 (VIb ~ VII)

VFラインセク95~100

第13次調査 Aトレンチ類型 (VIIc ~ VIId)

北盛土 (各層の層相)



- ローム質土層
- 粘土土層
- 炭化物土層

★ 内層下部の式 ☆ 内層下部の式

○ 内層上部の式 △ 内層上部の式 ◇ 内層上部の式

■ 西盛土 (各層の年代・層相)

図 2-41 盛土の土層断面

植物遺体は、クリ・オニグルミ・トチノキなどの堅果類が中心で、マメ科も比較的多い。ヒエ属、ウルシ属、ニワトコ属も検出されている(古代の森研究所2012)。動物遺体は、シカなどの大型陸獣と魚類の焼骨が検出されている。また、植物遺体のうち、クリやマメ科は、炭化しており、可食部が廃棄されている。

堆積層から採取した土壌試料をもとに花粉分析、植物珪酸体分析、土壌微細形態学分析が実施されている。花粉分析では、第35次調査区Fトレンチの第Ⅲ-3層(円筒下層d₂~円筒上層a式)でクリの花粉塊が検出されており、この部分では、廃棄後も擾乱を受けず、一気に堆積が進んだことが推測されている(安2013)。一方、第33次調査区A1区の14~66層(円筒下層d₃式~円筒上層b式)の堆積層については、土壌微細形態学分析から、土を廃棄した後、その場で人為的に攪拌させるような行為がなされていたことが指摘されている(パリオ・サーヴェイ株式会社2012)。また、堆積層に含まれる炭化材は、樹種同定の結果、各層の重量比でクリが70~100%と圧倒的に多くを占めることが明らかとなった(國木田2012)。

4 北西部斜面地の遺物包含層(第1・6・9・15・25・27・29・30次調査)

北の谷地区から第15次調査区にかけての台地北側斜面地に位置する(図2-42)。年代は、前期後葉~中期末葉の円筒下層c・d₁・d₂式、円筒上層a~e式・最花式・大木10式併行期で、標高約10~12mの低位段丘から沖館川に面した斜面地に形成されている。下部にある前期の堆積層は、谷状に窪んだ地形に時的なまとまりをもって集中しているが、中期の堆積層は範囲が広範囲におよぶ。総延長280m、幅20m以上、台地縁辺部に帯状に広がると推測されている。堆積土の厚さは最大3.6mであるが、これは前期を含めた土層の規模であり、中期のみだと最大1.6m程度である。

堆積層は、東から西に向かって拡大している。第Ⅲ層下部に前期(円筒下層d₁式)の包含層があり第Ⅲ層上部に前期末葉から中期後葉(円筒下層d₂~最花式)、第Ⅱ層に中期末葉(大木10式併行)の包含層がある。第Ⅲ層下部は有機質遺物を含み、上部は人為的な土砂廃棄層を主体とする。台地平坦面の部分には比較的水平的な堆積がみられるが、部分的に斜面下部に向かって大きく削られたような状況も確認できる。前期末(円筒下層d₁・d₂式)の堆積層は複数層に分層可能で厚みがあり、廃棄行為が活発でおかつ短期間で包含層が形成されたと考えられる。堆積土には多量の炭化物、被熱獣骨片、焼土ブロック、ロームブロックなどが含まれるが、層によっては、これらがほとんど混じらない二次堆積のローム質土層もみられる。中期前葉から中期中葉の堆積層は、黄褐色土と遺物が混じるものの、前の時期と比べてその量は減少する。中期後葉に再び土砂と遺物の廃棄が活発になるが、廃棄層の内容は褐色粘土を中心とし、炭化物・焼土・焼骨などが多く混入し、ともに廃棄される土器については小さく摩耗したものが目立つ。さらに中期末になるとほとんど土の廃棄は行われず、主に遺物のみが廃棄される状態となる。

他種遺構との重複関係については、最花式の堆積層の下位、円筒上層d式の堆積層を切る形で掘立柱建物跡の柱穴が10基以上検出されている。また、堆積層の最上部では、中期末の堅穴建物跡(第683号住居跡)が検出されている。

遺物は、土器・石器・土製品・石製品・骨角器・動植物遺体が出土している。土器は、円筒下層c~上層e式・榎林式・最花式・大木10式併行が出土している。最下層まで掘り下げを行った第6次調査区

周辺では、大木10式併行が第Ⅱ層、円筒下層c～最花式が第Ⅲ層から出土しており、これ以外の区域（第6鉄塔地区、第15次調査区）でも前期末葉から中期後葉の遺物が出土している。時期的には、前期末葉から中期初頭、中期後葉の遺物が特に多く、中期中葉はやや少ない傾向がある。石器は、石鎌・石槍・石匙・石錐・不定形石器・ピエスエスキュー・異形石器・磨製石斧・石核類・敲磨器類・石皿・台石類・砥石・軽石製品が出土している。土器と比べると出土量は少ない。土製品では、土偶・円盤状土製品・三角形土製品・ミニチュア土器、石製品では垂飾品・石製容器が出土している。また、有機質遺物が含まれる17層（円筒下層d₂式）以下では、漆器片や骨角器（骨刀）、人骨（歯）、オニグルミ・クリ・クワ属・サルナシ・キハダ・ニワトコ属等の植物遺体が検出されている。

土器片は、層中に砕片がまばらに混在して出土しており、個体復元されるものは多くない。とりわけローム質土の純層からの出土は僅少で、炭化物や黒色土が混入する層で比較的多くなる傾向がみられる。但し、第6次調査区の8層では、9a層との層理面にのるように遺物がまとまり、前期末葉から中期前葉の土器が個体ごとにまとまった状態で出土している。

堆積土から採取した土壌試料をもとに花粉、植物珪酸体、珪藻、寄生虫卵に関する分析が行われている（吉川ほか2006、羽生・佐藤2008）。このうち、花粉については、17層（円筒下層d₂式）以下でクリ属が卓越して検出されているが、トチノキはほとんどみられない。また、珪藻分析から、22層（円筒下層d₁式）以下については、水草の生育する流水域に接し、その影響下にある湿った土壤環境であったことが示されている。



図2-42 西北部斜面地の遺物包含層

5 その他遺物包含層

西盛土が広がる遺跡西側の丘陵には、北東側斜面（旧取り付け道路地区、第36次調査区）と南西側斜面（第18・37次調査区）にも中期後半に形成されたローム質土層の廃棄層の広がりが確認されており、いずれも、「盛土遺構」または西盛土の一部とした経緯がある（図2-43①・②）（青森県教育委員会2001・2004）。また、青森市教育委員会が平成6年度に青森都市計画道路建設予定地で実施した調査地点（5図③）（青森市教育委員会1996）にも、30～40cmの厚さで堆積するローム質土層の広がりが確認されており、遺跡西側の丘陵斜面には広範囲にわたり土や遺物を廃棄した遺物包含層が存在する可能性が高い。

これらは、西盛土の中心部とみられる第33次調査区Aトレンチからのローム質土層の連続性が確認されなかったことにより、第36次調査以降は西盛土とは区別した取り扱いをしている。しかし、いずれの包含層も、西盛土の堆積層と年代・層相・遺物内容の面で共通点も多く、特に西盛土の上部層（第Ⅲ層褐色）と、極めて近い内容をもつものである。西盛土と近接して存在するこれらの包含層の形成過程については、堆積層の時期ごとの広がりや内容を把握した上で、西側丘陵地全体の遺構との関係を視野に入れて、更なる検討を進めていく必要がある。

（齊藤（慶））

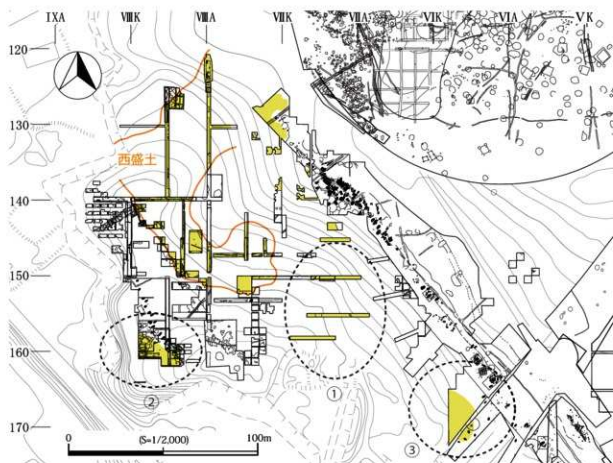


図2-43 その他の遺物包含層

第9節 溝状遺構

平成26年度の第38次調査において、北地区西側に位置する中段段丘の頂部付近で確認された遺構であり、本遺跡ではこれまで1基しか確認されていない。

溝状遺構は、確認された範囲で、長軸約25m、短軸約3mの大規模な直線状の遺構である。南西方向にさらに延長していた可能性もあるが、後世の削平により、不明である。精査を実施した箇所すべてで壁面が外傾して立ち上がることを確認した。底面は北東方向に向かい緩やかに傾斜を下げる。底面では第Ⅳ層が確認され、堆積土との層界は非常に明瞭である。また、堆積土は人為堆積の様相を呈する。

周辺や埋没後に構築されたピットを複数確認しているが、溝状遺構との関係については不明である。

出土した遺物は、ほとんどが円筒下層d式であり、1区において堆積土中の炭化物で放射性炭素年代測定を実施したところ、概ね出土異物と調和的な値を得ており、円筒下層d式期には大部分が埋没していたものと考えられる。

(濱松)

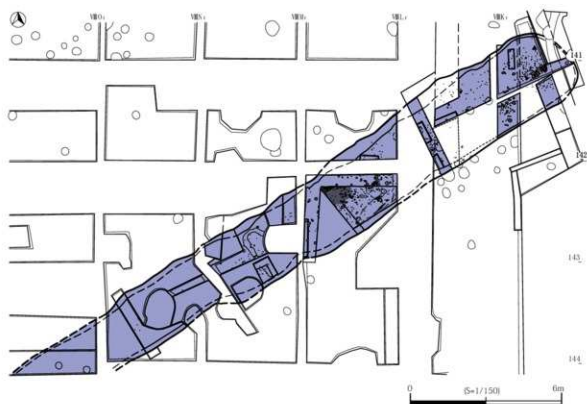


図2-44 溝状遺構

第10節 集落の変遷

三内丸山遺跡は長期間継続した集落跡であり、土器型式で言えば円筒土器10型式及び後続する土器型式3型式にもわたる。居住施設である竪穴建物が各土器型式期毎に確認されていることから集落が連続して形成されていたと考えられるが、それ以外の墓、貯蔵穴、捨て場などの集落の基本的な施設が必ずしも同様に確認されているわけではない。

また、土器型式から見てきわめて連続性が高い集落と考えられるが、その中に集落が形成されない空白の時期が存在する可能性も全くないわけではないが、現在の発掘調査の技術的な限界により、そのことを確認すること自体困難である。ただし、花粉分析等による古環境復元では、集落内外の植生環境に対して常に人為的に干渉していたことが明らかであり、縄文里山と呼ばれる人為的生態系が維持されていたことを鑑みるとこの地から人々の活動が消えた時間的空白の存在は考えにくく、空白の期間があったとしても植生の変化に影響しない、きわめて短い期間であったものと推測される。

以上の点を踏まえ、集落の変遷等について概観する。

なお、報告書が刊行された遺構については土器型式単位またはその細別型式単位の時期が判明していることから詳細な時期変遷を示すことができるものの、土坑墓などはおおよその時期が判るものの土器型式毎の時期認定が困難なものもあることから、集落の変遷を大きく6期に時期区分することとした。縄文集落の場合、施設配置を示す遺構の分布状況が土器型式単位で劇的に変化するとは限らず、この6期としたのは集落の変遷をより明確にすることを目的としており、各時期の時間的幅は均一ではないことにも留意されたい。

1 集落の形成

この地に集落が出現するのは前期中頃に成立した円筒土器文化期であるが、前期初頭や時期は確定できないものの表裏縄文施文の土器が出土していることから、広い台地上には円筒土器文化成立以前の遺構が存在している可能性があり、集落も同様である。

また、遺跡北地区に当初集落は形成されるが、前期の集落はその大半が中期に構築された南・北盛土等に覆われており、未発掘であるため不明な点も多い。なお、これまでの発掘調査において盛土の下層には前期の遺構群が存在することが確認されていることから、集落は確実に形成されていたと考えられる。

(1) 前期の集落

第I期 前期中葉（円筒下層a・b式期）

集落は段丘北側の北地区を中心に展開する。竪穴建物・大型竪穴建物・土坑墓・埋設土器・貯蔵穴・捨て場などから構成される。竪穴建物は北の谷西側から段丘中央の平坦部にかけて構築され、重複が多い。すでに大型竪穴建物も段丘中央に出現することは注目される。墓は集落出現期のものが南盛土の下層から1基だけであるが検出された。さらに南盛り土の下に墓域が形成されている可能性がある。子どもの墓である埋設土器も竪穴建物に近接して作られる。貯蔵穴は竪穴建物の近くに小型の袋状土坑が分布する。特筆されるのは大規模な捨て場で、北の谷と沖館川に面した斜面（第6鉄塔地区）

から発見されている。どちらも低湿地や泥炭層となっているため土器・石器の他に大量の動植物遺体・木製品・骨角器などが出土した。また、北の谷からは南北に延びる道路跡と土留め用の杭列も検出された。これを介して集落への出入りが行われていたものと考えられる。

第Ⅱ期 前期後葉～末葉（円筒下層c・d式期）

同様に段丘北側に展開するが、遺構の分布範囲が北の谷の東側にも拡大することから集落規模は拡大する傾向にある。少なくとも前期終末には北の谷をはさんで、大きく西側に住居域、東側に列状墓による墓域が形成される。この土地利用の原則はその後集落の終焉まで大きく変わることはない。住居域は堅穴建物の建て替えや拡張が頻繁に行なわれたためか、重複が激しい。長軸13mの大型堅穴建物が北の谷の東側に単独で構築される。

北の谷の谷頭東側に円形や楕円形の土坑が比較的密集して造られる、土坑墓の可能性が高い。前期終末には確実に列状墓が出現するが、その前段階の可能性もある。子どもの墓である埋設土器は堅穴建物の近くに分布する。貯蔵穴は引き続き堅穴建物の近くに配置されているようである。大規模な捨て場がⅠ期と同じ場所に継続して形成される。北の谷の道路はこの時期には廃絶している可能性が高い。また、大型掘立柱建物が北地区北盛土の北西側に構築され始める可能性がある。北・南・西の各盛土の形成も同様である。

（2）中期の集落

第Ⅲ期 中期初頭～前葉（円筒上層a・b式期）

北地区を中心とするが、集落規模はさらに拡大傾向にあり、北地区全体に展開する。堅穴建物、大型堅穴建物、土坑墓、埋設土器、貯蔵穴、大型掘立柱建物、掘立柱建物、盛土から構成される。堅穴建物は引き続き谷の西側と南斜面に構築される。大型堅穴建物は段丘の北側に構築される。土坑墓は確実に列状墓が形成される。列状墓の構築と同時にその間を通る道路もほぼ同時期に整備されたものと考えられる。埋設土器は北の谷の東側の平坦部から斜面にかけてと西側の居住域北側に密集して分布する。貯蔵穴は段丘の縁辺部に密集して構築される。掘立柱建物は段丘中央部に東西棟の建物が並列し、南盛土の南西側にも東西棟の建物が並列して分布する。どちらも同時に複数棟存在した可能性がある。南盛土の南西側にも掘立柱建物跡が並ぶ間に空地が確認でき、道路跡と考えられる。北・南・西盛土の各盛土ともに引き続き構築形成される。

第Ⅳ期 中期前葉～中葉（円筒上層c・d・e式期）

集落が最も拡大する時期で、北・南・近野地区全体に展開する。堅穴建物、大型堅穴建物、土坑墓、埋設土器、貯蔵穴、大型掘立柱建物、掘立柱建物、盛土、道路、粘土採掘穴から構成される。堅穴建物は引き続き谷の西側と南斜面を中心に段丘全体に構築される。大型堅穴建物は段丘中央から北側に構築される。土坑墓は列状墓が継続して形成されるとともに周囲を確で囲んだ環状配石墓が出現する。埋設土器はⅢ期とほぼ同じ場所に構築されるが、この時期が最も数が多い。貯蔵穴は大型化し、南地区及び段丘縁辺部に密集して構築される。掘立柱建物は段丘中央部に東西棟の建物が並列して、南盛土の南西側にも並列して東西棟の建物が密集して分布する。巨木を使った大型掘立柱建物も引き

続き構築される。盛土の構築は連続して行われ、さらに大型化する。

第V期 中期後半（榎林式・最花式期）

引き続き集落規模は第IV期と同様であり、明らかな縮小傾向にはない。第IV期に比べて各施設の配置の規則性が崩れはじめるようである。集落は同様に北・南・近野地区に展開する。堅穴建物、大型堅穴建物、土坑墓、埋設土器、貯蔵穴、掘立柱建物、盛土、道路、粘土探掘穴から構成される。堅穴建物は引き続き谷の西側と南斜面を中心に段丘全体に構築される。大型堅穴建物は段丘中央から北側に構築される。土坑墓は列状墓が継続して形成されるが環状配石墓が構築される。埋設土器は急激に減少する。貯蔵穴は北地区中央部、西盛土西側の台地縁辺部や斜面にも密集する。大型掘立柱建物も引き続き構築される。盛土も継続して構築されるが、その活動量は減少傾向にあり、この時期以降には形成されない。

第VI期 中期末葉（大木10式併行期）

集落は明らかに縮小傾向にあり、北地区に主に展開する。堅穴建物、土坑からなる。土地利用の規則性は薄れ、各施設の規則的な配置はみられない。第II層黒褐色土の形成が顕著となり、第V期とは大きく環境が変わったことが推測される。

2 中期における集落構造と特徴

(1) 集落の構造

中期の集落はその全体像がおおよそ判明しているものの、後半については集落が拡大し、北・南・近野地区全体に広がるため、まだ発掘調査が不十分な部分がある。集落の構成要素として、堅穴建物、大型堅穴建物、大型掘立柱建物、掘立柱建物、貯蔵穴、土坑墓（成人用埋葬施設）、埋設土器（小児用埋葬施設）、粘土探掘穴、盛土、道路などがある。

堅穴建物は前期に引き続き谷の西側と南側斜面に多数分布する。前期末葉から中期初頭にかけては、床に段を持つものや長軸の一端にピットや周堤等の付属施設が出現する。本集落が最も拡大、繁栄する時期は中期中葉～後葉にかけてである。堅穴建物の規模は他の時期に比較して小型化し、床面積に大きな差が見られないなど、他の遺跡に比べて違いがある。一方、長軸が30m超の大型堅穴建物（ロングハウス）が作られるのも特徴である。このような大型堅穴建物は各時期に少なくとも1棟以上造られ、しかも集落の中心近くに構築され、建て替え・拡張を頻繁に繰り返しており、使用頻度の高さがうかがえる。

墓は成人用埋葬施設の土坑墓、小児用埋葬施設の埋設土器が地点を異にして構築されると考えられるが、北の谷の東側では列状墓と埋設土器が共存する様子も見られる。成人用土坑墓は谷の東側に、最大幅約15mの道路をはさんで向かい合うように東西に並列して配置される。この墓列と道路跡が、これまでの発掘調査で約420mにわたって東側へ延びていることが確認されている。また、集落東側では南盛土西付近から南北方向に延びる道路跡が検出され、斜面側（西側）には環状配石墓が配置される。小児用埋設土器は土器を直立した状態で埋設したものである。土器は完形の他に、底部穿孔・側面穿孔、口縁部打ち欠き、底部打ち欠き、口縁部・底部打ち欠きなど形状に違いがある。中か

ら掘り拳大の円礫が数個出土する場合がある。

掘立柱建物跡は集落北西の台地の縁、集落の中央部、南盛土の南西付近からまとまって検出されている。これらの地点は時期毎の変遷ではなく、機能・用途別に建てられたものと考えられる。北西端の掘立柱建物跡は特に大型で、直径約1mのクリの巨木を使った長方形・6本柱、1間×2間の構造である。中央の建物跡は同規模の建物と同時に複数棟存在した可能性が高い。盛土南西付近の掘立柱建物は南北に並列するようである。これらは全て1間×2間の長方形で、梁行・桁行とも規格性が高いことから木柱列ではなく建物と考えられる。

貯蔵穴は集落の外側、台地の縁や斜面に密集して造られている。粘土採掘穴は谷の東側、土坑墓列の南側から検出されている。平面形は不整形であるが底面はほぼ円形の掘り方が連続している。いずれも下部の粒径の細かな粘土質に近い火山灰の採取を目的としている可能性が高く、壁際は袋状になっており崩落の痕跡が見られる箇所がある。

盛土は谷の西側（北盛土）、南斜面（南盛土）、集落西側（西盛土）に構築されている。残土・排土と一緒に土器・石器・食物残渣を廃棄したもので、平坦に整地されていたようである。その繰り返しによって大規模な盛土（マウンド）を形成したのと考えられ、ヒスイ製大珠、土偶、小型土器などが多数出土することから、祭祀行為そのものや祭祀遺物の廃棄・埋納を行う空間であったと考えられる。

（2）集落の特徴と画期

本遺跡における中期の集落の特徴として、①多数の堅穴建物とそれ以外の施設からなり、全体として一定の占地の傾向があり、計画的に配置されていると見られること、②存続期間が長く、継続的である、③生業活動に関する多様な道具を保有し、④社会的・文化的活動に伴う遺構・遺物を有する、⑤多年にわたる物資の集積の結果、遺物量が多いことなどがあげられ、いわゆる拠点集落としての要件を備えており、拠点集落として理解できる。拠点集落の出現・成立は、周辺集落との役割や機能の分担、日常的なネットワークの存在が不可欠であり、地域社会の中での位置づけが確立していたものと考えられる。

集落の変遷を6期に示したが、第I期は集落の出現期である。大型建物跡や土坑墓、大規模な捨て場の存在からすでに拠点集落としての要件を備えていたことになる。しかしながら、周辺には熊沢遺跡や岩渡小谷遺跡、沖館川の対岸には石江遺跡など同時期の集落も点在することから、同時性についてはさらに検討を要する。第II期の後半から第III期の前半は集落の拡大期であり、多数の堅穴建物が広範囲に構築される。列状墓の形成、記念物とも呼べる盛土や大型掘立柱建物の構築など新たな施設が出現する。ヒスイや黒曜石の搬入が見られるのもこの時期からであり、交流・交易も活発化していると言えよう。第IV期も集落の拡大期と言えるが、集落規模そのものは第III期でほぼ確定していることからむしろ集落の充実期とした方が適切である。盛土の形成も活発に行われ、環状配石墓の構築も見られるようになる。東西や南北の道路の整備が一気に進められたものと考えられる。第V期も集落の充実期であるが、堅穴建物の棟数そのものは減少傾向にあり、土偶の製作や盛土の形成も前段階ほど活発ではない。本遺跡最大規模の大型掘立柱建物はこの時期のものである。第VI期は集落の終焉期であるが、堅穴建物、墓、貯蔵施設、捨て場などの占地のあり方ははっきりとしない。盛土の形成、

大型掘立柱建物の構築はされていない。土壌の形成から見て、植生を含めた生活環境の変化が想定される。

3 周辺集落との関係

当初、前期の集落は北地区に出現するものの、前期末から中期初頭にかけて南地区へと規模が拡大する。しかしながら、集落規模という点で近野地区を含んでの一体的な集落として理解することについては一考を要する。その理由として、集落の拡大期である第Ⅱ期・第Ⅲ期の遺構群が南地区や近野地区にはほとんど見られず、第Ⅳ期である中期中葉以降の遺構群が大半を占めており、時的な変遷と面的な変遷が必ずしも連動していない状況がある。

三内丸山遺跡の集落範囲を考える場合、その規模は東西に伸びる列状墓を伴う道路跡と南北に伸びる環状配石墓等を伴う南北の道路が確認できる範囲が適当であり、この範囲内には集落としての基本的な構成要素が確実に分布し、集落として完結する。この範囲内で時期的変遷をおおよそ理解できる。

さらに大型掘立柱建物や大型竪穴建物など集落において一時期1棟と考えられる施設が近野地区を含むことによって同時に複数棟存在することになり、このような集落構造は円筒時文化圏内ではほとんど見られない。むしろ隣接する集落として理解すべき余地があるものと考えられ、このことは前期後半における近野地区の集落のあり方も三内丸山ムラと一体というよりも隣接するムラと考えた方が合理的である。しかし、同一のムラだろうが隣接するムラであろうが、生業圏は確実に重なることになることから、単純に隣接するムラとは片付けられないことも指摘しておきたい。また、盛土や大規模な墓地は近野地区には見られないことから、祭祀の空間や墓地を共有する可能性も否定できない。

中期中葉以降、本遺跡周辺には集落が濃密に分布する傾向がある。そのような状況においても本遺跡は規模や存続期間として傑出しており、拠点中の拠点としての位置づけはかわらないことが最大の特徴と言える。周辺集落の変遷や消長など、本遺跡との関連性をさらに検討する必要があり、このことが単なる一集落の変遷のみならず地域社会の実態や変遷を考えることであり、点から面へと集落論が昇華する段階に突入する、大きな意義が伴うことを示しておきたい。

(岡田)

